
IS -インフィニット・ストラトス- スカルハート

イクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - スカルハート

【Nコード】

N3989R

【作者名】

イクス

【あらすじ】

IS開発をしていた鈴木勇は、半年前に開発中のISに触れると作動してしまった（このことは、社内機密になっている）。半年後、ISが使える男がIS学園に現れたと情報を聞いた上司の命令でIS学園に行くことになる。

初作品です。文学の才能は無いので、誤字、脱字、原作崩壊、キャラ崩壊があるかもしれませんが多めに見てください。

3月31日追記：オリジナル展開を増やそうと思いき少しプロローグを増やしました。

4月4日 追記・全体的に誤字、脱字等の見直しをしました。

プロローグ（前書き）

始めまして、イクスです。

誤字、脱字等あるかもしれませんが多めに見てください。

3月31日追記：オリジナル展開を増やそうと思いつき少しプロローグを増やしました。

プロローグ

昔、人類は宇宙という、新たなステージに足を踏み出そうとしていた。

「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」

この言葉と同時に全類は新たなステージに足を踏み出した。

数十年前ある人物は言った。

「人類は次のステージに上がるには進化する必要がある」

その言葉で世界は新たなステージに上がる為の研究を始めた。

数年後、ある研究施設。

そこでは数十人の子供が集められてた。

歳はまだ小学校に行っている位だろう。

そこでは、様々な訓練が行われ、まだ幼い彼らには辛い日々が続いた。

一日、一週間、一ヶ月、一年と年月は流れて行った。

気付けば残ったのは3人になっていた。

歳も訓練を始めた時よりも成長していた。研究は失敗・・・いや、成功していたのかもしれない。

研究施設は閉鎖が決定し、残った3人少年達はその力を恐れた者達によって、眠りに付くことになった。

「兄さん・・・また会える？」

「ああ・・・きつとまた会えるさ」

「兄さん・・・また・・・ね」

「またな」

少年達は長い眠りに付くことになった。眠りに付いた少年達を残して研究所は閉鎖された。

さらに数年後、世界は宇宙に踏み出すのではなく、地球で別のステージに踏み出していた。

閉鎖研究所に数十人の武装した男達が現れた。

「目標発見・・・3つ中1つが破損している模様・・・了解、おい、二つだけ運び出すぞ」

数十人の男達の手によって二つのカプセルが運び出された。

数週間後、そこに新たに二人現れた。

「もう、カプセル運び出された後の様ね」

「・・・ああ」

「あ、まだ奥に一つ残ってる・・・。ダメね、ダーリン。このカプセルもう死んでるみたいよ」

女性は残ったカプセルを見ながら言った。

「いや、モニターの破損だけだ・・・まだスリープ状態になってる」

ダーリンと呼ばれた男性はパネルを操作しながら言った。

「ここは・・・どこ・・・？ あなたは・・・だれ？」

「私はユイ・・・あなたは？」

「おれは・・・だれだ？」

ナンバー『U-001』と書かれたプレートがあった。

「そうね・・・あなたの名前は」

・
・
・

そして、3年の時は流れ運命は交差する。

サナリイIS研究室

「大変だあゝ！！」

スタッフの一人が大慌てで廊下を駆け巡っていた。

「オーティス主任、大変です」

「何だね、騒々しい」

オーティスと呼ばれた人は、声のしたほうに振り向いた

「なんでもIS学園の試験会場で男がISを起動させたそうです」
「なにい！？ユウを探せ！どうせ、いつもの所だ」

サナリイ屋上

「ふあゝああ。今日も空が青いなあゝ。」

少年は空を見上げながら昼寝をしていた。

「ユウいる？」

屋上のドアを開けて一人の女性が呼んでいる。

「ミユウラさん？ここにいますよ」

「ユウ。オーティス主任が呼んでるわ」

「なんか嫌な予感がしますね？」

あの人が俺を呼ぶときはろくな事にならない。

「何でも二人目のISを使える男が見つかったらしいわ」

「はあゝ本格的に嫌な予感がします・・・」

サナリイIS研究室

「ようやく来たか」

「はあゝ、何ですか」

大きなため息をつきながら質問した。

「ミューラ君からすでに聞いているだろう。」
「あゝIS使える男が見つかったってやつですか？」
「そのとおりだ」

マジで嫌な予感がする。恐る恐る質問する

「まさか、IS学園に行けなんて言いませんよね」
「ふふふ・・・そのまさかだ!!」

「嫌です!!俺はISで戦いをするつもりはありません!俺は開発者になりたくてここに来たのに半年前に起動に成功してから女性には扱いが難しいISの起動ばかり俺にやらせてるじゃないですか!」

そう、俺はIS開発者だ半年前ISの起動実験でISが起動してしまっ
てから俺の人生は変わってしまった。
主任命令でISのテストパイロットもやらされるようになった。
公表はされていないがな。

「まあまあそう言うな。悪い話では、ないんだぞ。」
「・・・」
「キミがこの前作ったIS・・・何って言ったかな」
「F97ですよ主任」

ミューラさんがすぐに助け舟を出した

「そうそう、それだそれ。F97の評価を高める最大のチャンスだぞ」
「チャンス・・・」

F97 - 俺が作ったIS。

近代のIS戦闘では敵も味方もシールドバリアを持っているため遠距離の戦いでは、決定打になりにくい。

だから敵のシールドを突破し操縦者にダメージを与え短い時間で決着を付ける。そのためにF97は近接戦闘に強く調整されていた。

しかし、上層部からは、この案を却下された。理由は性能が高すぎてコストが掛かるので却下された。

「IS学園でF97の有能性を高めれば上層部も納得するはずだ！」
「ん〜」

悩んでいるユウにミューラが言った。

「それに各国から専用機持ちがIS学園に集まるから、戦闘経験を蓄積するにはいい環境だと思いますよ」

「わかりました。行きますよ」

「では、よろしく頼むぞ」

オーティスがホットしたように言う。

サナリィー自室

ユウの部屋はIS関連の雑誌や参考書、ロボット物の漫画が所狭しと積み上げられていた。

ユウはパソコンに向かっていてF97の調整をしていた。

「そつだ、こいつにも名前を付けてやらないと」

名前をどうするか悩んでいると一冊の漫画が目に入った。

「スカルハート・・・これでいいな。だったら・・・」

F-97 改めスカルハートの調整を始めた。調整といっても胸部中央と頭部にドクロのレリーフを入れていた。

プロローグ（後書き）

3月31日追記：主人公とその他の設定のため少しエピソードを追加しました。

入学式（前書き）

1年前までは私も不安を抱えた1年生でした・・・ではどうぞ

入学式

入学式終了後、一年1組の教室にてSHR中。

「ZZZZZZ」

遅くまでISの調整をしていたため寝不足であったため教室に着いてから机に突っ伏していた。

しかもISの調整は終わらなかったのでミューラさんに任せて学校の入学式を迎えた。

左右からとても視線を感じる。

ちなみに座っている席は真ん中の最後列である。

バアンツ!!

「いつー!!」

前の方で誰かが叩かれている気がする。

「それと、そこー!!」

ビュッー!!

「いつてえ〜!!」

机の下を見るとチヨークが1本落ちていた。

視線を前に向けると黒スーツにタイトスカートの女性がこちらを睨んでいた。

「おはよびじいさまあ〜す。」

あくびをしてしまった。すると・・・

ビュッー！

「いつ〜！」

再びチヨークが飛んできた。

「まだ、食らい足りないようだな。」

「いえ、もう結構です。」

最前列にいる男は主席簿で叩かれているようだ。

あいつが俺と同じくISが使える男・・・織斑一夏・・・か。

そんなことを思っていると黄色い声援が響いていた。

・
・
・

一時間目が終わると織斑は、女生徒に連れられて廊下に出て行った。

あの接し方からすると幼馴染か？と思っていると教室内の視線が俺に向いた。

俺は再び机に顔を突っ伏した。

「これは・・・つらい・・・」

次の時間が始まるまで視線は俺を向いていた。

・
・
・

二時間目。

正直、授業は退屈だった。

元々ISの開発に関わっていたため基本的な知識は持っているから

だ。

そんな中、織斑一夏が言った。

「ほとんど全部分かりません」

「え……全部、ですか？」

先生は慌てている。

まあ男には基本的に必要ない知識だからな。

バアンツ！

また叩かれている。

退屈な授業が続いてく……。

・
・
・

二時間目が終わると前から誰かが歩いて近づいてくる気配がした。顔を上げるとそこには織斑一夏がいた。

「織斑一夏……か」

「ああ、えっと……」

「自己紹介はお前で終わったからな。鈴村勇だ。ユウって呼んでくれ」

そういって手を出す。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

互いに握手を交わした。すると

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「ん？」

俺と一夏は、声のした方を見るとそこには、金髪の鮮やかな女生徒がいた。

「聞いてます？お返事は？」

「はあ」

「あ、ああ。訊いているけど・・・どっいつ用件だ？」

俺はため息を突き、一夏は答えていた。

すると目の前の女生徒はわざとらしく声を上げた。

「なんですの、その態度とお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なんですよ！」

「はい、はい。それでなんですか？イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさん？」

「あら？わたくしをご存知ですか？」

「今年、入学した代表候補生の名前くらい知っているさ・・・」

少し機嫌が良くなったらしく冷静な声で返ってきた。

「ふうくん、で、代表候補生って何だ？」

「お前・・・、何にも知らないんだな？」

あきれながら言った。

「おう。知らん」

威張りながら言う、一夏に俺は説明した。
セシリアのほうを見るとすごい剣幕で今にも怒り出しそうな顔をしていた。

そこで俺はセシリアの機嫌が直りそうな言葉を使い説明を始めた。

「簡単に言えば、エリートだな。国連代表のIS操縦者の候補生として選出されるエリートのことだ。さらに、ここにいるという事はエリート中のエリートって事だろう。」
「そう、エリートなのですわ！」

セシリアは微笑を浮かべていた。

「それに、わたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調しているな・・・そう思っていると一夏が言った。

「入試って、あれか？ISを動かして戦うやつ？」
「それ以外に入試などはありませんわ」

嫌な予感がした。

「あれ？俺もたお・・・」

的中した慌てて一夏の口をふさぐがもう遅い。
セシリアは目を驚き見開いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃないか？」

「つまり、わたくしだけではないと・・・？」

「いや、知らないけど」
「はあ〜」

こいつは少しは気を使う気はないのか？そう思っていると矛先が俺を向いた。

「もしかして、あなたもですか・・・？」

「いや、俺は・・・」

これ以上言ったら暴動が起きかねない。

「どうなんですの！！」

「俺はー」

キーンコーンカーンコーン。

助かった・・・。

心の中でそう思った。

「っ・・・！またあとできますわ！逃げないことね！よくって!？」

俺は一夏と一度、顔を見合わせたため息をついた。

．
．
．

三目は、一、二時間目と違った雰囲気だった。

「再来週に行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決めないといけないな」

クラス代表か・・・面倒くさそうだと思っているとクラスの女子が

推薦を始めた。

「はいつ！織斑くんを推薦します」

「私もそれがいいと思います！」

一夏は立ち上がりアタフタしていた。

あいつも災難だなと思っていると。

「私は、鈴村くんを推薦します」

「な！？」

俺も立ち上がってしまった。

「待ってください。俺はそんなのやりたー」

「自薦他薦は問わないと言ったはずだ。他薦された者に拒否権がない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでもー」

一夏が反論しようとするやと突然甲高い声が遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのはセシリア・オルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「先生、立候補が出たんですからー」

「だめだー！！」

却下、速いな。

二人の口論は続いている。

「決闘ですわ!!」

「決闘？あのカード使ってやるやつか？」

「ユウ、それ違うそれは決闘デュエルだ」

「ああ、違うのか・・・」

争いごとは苦手だ。

まあ一夏が申し込まれてるんだしな。

でも、嫌な予感が・・・

「それから、鈴村勇」

来たよ。

「あなたもですわ!」

「来ると思ったよ・・・俺の負けでいいから俺の変わりに代表になつてくれよ」

「男に代表を譲って頂いたことがバレたらオルコット家、末代までの恥ですわ」

「はあくいいだろう。その挑戦受けてやる」

セシリアとにらみ合っているとチヨークが飛んできた。

「「いつ」」

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と鈴村とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

「ちょっと待ってくれ俺は・・・なんでもありません」

決闘の話についてこれてないー夏が反論しよつとしたが目で殺され
たようだ。

放課後（前書き）

第三回です

放課後

放課後、俺と一夏が雑談していると山田先生がやってきた。

「えつとですね、お二人の寮の部屋が決まりました。」

そう言つて、部屋番号とカギを渡された。

「俺たちの部屋、決まつてないんじゃないですか？」

「織斑くんはしばらく相部屋で我慢してください。鈴村くんは、今は一人部屋です」

今は、という事は誰かが来る可能せいがあるということか……。

「突然言われても俺たち荷物、何にも持つてないですよ？」

「あ、いえ、荷物ならー」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

一夏に荷物が渡された。

「じゃあ、俺は帰つてもいいですか？」

「安心しろ。お前の荷物は届いているついて来い」

「はい？」

「さつさとしろー！」

「はい！」

「じゃあな、一夏」

「おーまたな」

織斑先生の後に続いて移動し、IS学園職員室に到着した。移動途中、全く会話がなかったのも辛かった。

「さつき、これが送られてきた。」

大きいダンボールと小さなダンボールが置いてある。

「ありがとうございます」

「待て、少し聞きたいことがある」

「なんですか？」

「お前は、何者だ？」

ダンボールの送り主を指差した

「あれ、聞いてませんか？俺、サナリイーに住み込みで働いていたんですよ」

「ほお、何をやっていたんだ？」

「ISの開発関係の手伝いです」

「なるほど、そこでISを起動させたんだな。」

「はい。それで、どうして俺は何で一人部屋なんですか？一夏と同じにすればいいのに」

相部屋にするなら俺と一夏のはずなのになぜか違った。

「お前は、面倒見が良さそうだからな。今度、一組に転校生が来た時に相部屋にするつもりだ」

「なるほど」

「では、行っていいぞ」

「失礼します」

一礼してから職員室から出て行く。

・
・
・

職員室から出て数分後。

俺は今日から寝泊りする寮にやってきた。

「あ、鈴村くんだ」

「どうも」

廊下を歩いているとラフな、ルームウェアの女生徒とすれ違った。

「ここか？」

1030号室。

紙に書いてある部屋と同じだ。

カギを開けて中に入る。

「ふう〜疲れた」

床にダンボールを置いて一息つく。

「さて、大きいダンボールは日用品だろうけど・・・コッチは何だ」

小さいダンボールを開けながら呟いた。

「あれ？もう調整すんだのか」

中には手紙が入っていた。

「ユウへ」

ミューラさんからの手紙だ

「朝、頼まれていたスカルハートの調整が終わったので送ります。あと、これは私からの入学祝いです計画的に使ってくださいね。オーティス主任もあなたがいないので少し元気が無いように感じられます。長い休みにお友達を連れてきてくださいね。ミューラより」

入学祝って3万も……。いつかお礼をしないと。

「さて、寝るかな」

夕飯は食べてないが睡魔には勝てない。
俺は電気を消して寝ることにした。

・
・
・
・
・

翌朝。

俺は一夏と篠ノ之さんの三人で食堂で朝食を取っていた。
篠ノ之さんは、不機嫌そうだ。

「ユウ、お前朝からそんなに食うのか？」

「？当たり前だろう」

一夏は俺の朝食の量をみて唾然としている。
俺の朝食の量は一夏の倍はある。

「それよりお前、何かしたのか？」

篠ノ之さんに聞こえないように言う。

「うん、まあ、いろいろ。」

「一日目からお前はー」

視線を感じる。

視線の方向を見るとジト目でコツチを見ていた。

俺たちは話すのを止めて朝食に向かい合った。

しばらくするとー

「お、織斑くん、鈴村くん隣いいかな？」

朝食のトレーを持った女子、三人が俺たちの返事を待ちわびていた

「ああ、別にいいけど」

「俺も、別にいいぞ」

話しかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は、ガッツポーズをしている。

周辺からはいろいろなざわめきが聞こえてきていた。

「織斑くん朝すつごいたべるんだね」

一夏の朝食を見ながら女子が言った。

「お、男の子だねっ」

「俺は夜少なめにとるタイプだから、朝たくさん取らないと色々き

ついんだよ」

「それに、比べて鈴村くんはあんまり食べないの？」

俺の朝食を見ながら言った

「いや、つい先ほどまでは俺の倍は、あつたよ」

「……えっ？」

「俺は、朝昼晩大盛りで食べるぞ。これでもまだ少ないほうだ」
「……えっ」「」

女子達は珍獣を見るように俺を見つめていた。

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

「はあ」

一夏の質問に俺はため息をつくしかなかった。

「…織斑、鈴村、私は先に行くぞ」

「ん？ああ、また後でな」

「ごちそうさでした。じゃあ俺も、また後で」

「ユウもか、ああ、後でな」

俺も篠ノ之さんを追うようにテーブルを後にした。

少し先に篠ノ之さんを見つけたので話しかけてみた。

「篠ノ之さん」

「？なんだ鈴村が何か用か？」

サムライ見たいだな・・・見たこと無いけど。

「一夏とは、どう言う関係なんですか？」

「ただの幼馴染だ！」

「そうですか。だったら一夏がISの使い方教えてやったらどうですか？」

「なんで、わたしが」

「赤の他人に教わるより知ってる人に教えてもらったほうがいいだろう」

「それは、そうだが・・・だったら鈴むー」

「じゃあ、俺はこれで」

「えっ、ちよとー」

言いたいことは、伝えたのでさっさとその場を後にする。

・
・
・

教室での、SHR中に織斑先生が言った。

「ところで、織斑と鈴村のISだが準備するまで時間が掛かる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。専用機を用意するそうだ」

教室の中がざわめき始めた

「先生、俺のはいらさないですよ。昨日届きましたから」

「「「「「ええー!!」「「「「「」

教室の中が先ほどと比べ物にならないくらいざわめいた。

・
・
・

授業が終わると早速、一夏はセシリア・オルコットに絡まれた。クラス中に聞こえる声で言っている。俺は絡まれる前に教室からの脱出を試みたが遅かった。

「それから、鈴村さん。あなた、専用機持ちでしたのにどうして言わなかったのかしら？」

「聞かなかっただろ？」

「馬鹿にしていますの!？」

「さあ、どうでしょう」

それを聞いてオルコットはどこかに行ってしまった。

「ユウ、飯食いに行こうぜ！」

「ん? いいよ」

俺がそう答えると次は篠ノ之さんを誘っていた。

篠ノ之さん強引に連れて行くことにした、一夏は次にクラスの子に声を掛け始めた。

何人が着いて来る様だ。

それにしても篠ノ之さんは、腕を組まされてるのが嫌そうだ。

あっ、投げ飛ばされた。

「.....」

「腕あげたなあ」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか? 剣術のおまけだ」

着いて来ている女子はかなり引いている。

「え。えーと.....」

「私たちちやっぱり.....」

「え、遠慮しておくね・・・」

蜘蛛の子を散らすように退散していった。

「あゝ、俺、山田先生に用事があったんだ。わりい二人で行ってくれ」

「そつなのか？じゃあ、後でな」

「おお」

俺は二人を見送った。

「さて、仕込みに行きますか・・・」

俺は山田先生に3年生の情報を聞きに行った。

デュエル TURN 1 VSフルーティアーズ(前書き)

第四話です。どうぞ。

デュエル TURN 1 VSブルーティアーズ

放課後の剣道場。

仕込みはうまくいったらしい。

一夏は篠ノ之さんに剣道の稽古をつけられていた。

しかし、少し手合わせを開始して十分。

一夏の一本負け。

そのため、篠ノ之さんは怒りのハイパーモード真っ最中だ。

「はあ〜」

俺がため息をついていると。

ギャラリーの落胆した声が聞こえた。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い？」

「ISほんとうに動かせるのかなー」

それを聞いて俺は不安になった。

「大丈夫か・・・あれで」

・
・
・
・
・

そんなこんなで一週間たった。

今日はセシリア・オルコットとの決闘の日。

今は第三アリーナのピットにいる。3人いるため総当たり戦になっ

てしまった。

一夏のISは到着が遅れているため、最初に俺が戦うはめになった。

「鈴村、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。」

「了解」

待機状態のISを展開する。

俺の体を包むように装甲が覆う。展開し終わるとそこにはマントを身に着け、胸部中央にドクロのレリーフがあるのISがそこにいた。

「あれえ〜、このISってF97ですよ？この前のトライアルに落ちたISじゃありませんか？」

不思議がる山田先生。

「これは、正式に採用されればF97ですよ。ですけど今はスカルハートです。」

山田先生の言葉が少し心に刺さる。

「ドクロってなんだか格好悪くないか？」

「ハツタリだよ、ハツタリ」

一夏の疑問に答える。

「じゃあ、行ってきます。」

「がんばれよ！」

「鈴村・・・勝って来い！」

一夏と篠ノ之さんに激励されてから俺はアリーナにむかった。

・
・
・

ピットからアリーナに移動すると既に青いISがそこにいた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアが鼻をふふんと鳴らす。また腰に手を当てたポーズが様になっっている。

その時、ISのハイパー・センサーから情報が送られてくる。

『敵IS「ブルーティアーズ」と確認。敵武装「スターライトmk?」と一致』

「最後のチャンスをおげますわ」

「御託はいい、始めよう」

「そう。残念ですは。それならー」

すぐにISのハイパー・センサーから警告が入る。

「警告。敵ISが射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギーを確認。」

「お別れですわね！」

セシリアが撃ったレーザーが戦いのゴングを鳴らした。

スラスターを噴かして回避した

。そのままスラスターを使いセシリアに向かっていった。

スターライトmk?から放たれる何発もレーザーが放たれる。

回避できなかったレーザーがABCマントに当たりマントの表面が蒸発し、レーザーを四散させる。

「どうなっているんですの?」

セシリアは驚いていた。

自分の撃っているレーザーはたしかに命中しているのだがまったく相手のシールドエネルギーを削ることができないからだ。

「どうした、イギリスの代表候補生はこの程度なのか?」

「まだ、まだですわ!」

そう言うと、彼女のISからビット型の兵装を使用してきた。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブツー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で!」

上下左右から四機のビットとスターライトmk?による攻撃を回避する。

「遅い!」

そう言って、四機のビットをビーム・ザンバーで一機、一機切り裂いて破壊していく。

「さあ、これでお前の切り札は無くなった様だな・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

セシリアが放った四機のビットを破壊し少し挑発したが言葉が返ってこない。

いやな予感がする・・・だけど。

「これで終わりだ!!」

背中のスラスターを噴かし一気にセシリアとの距離を詰めていく。スターライトmk?を牽制で撃ってくるが全てを回避してビーム・ザンバーの間合いに入る。

「ーかかりましたわ。」

にやり、と。セシリアは笑うのが見えた。

「っ!!」

予感的中、セシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ!!」

さっきあでのビットと違いレーザーではなくミサイルが放たれた。

ドガアアアンツ!!

爆発音と閃光が俺を包んだ。

・
・
・

視点はビットに移る。

「ユウっ・・・!!」

「鈴村つ……!!」

モニターを見つめていた一夏と篤は、思わず声を上げた。しかし、教師二人は、爆発の黒煙に埋まった画面を見つめていた。

「終わったな……」

・
・
・

再び視点はアリーナに戻る。

セシリアは勝ちを確信していた。

いくらISといえ至近距離でのミサイルの爆発に耐えられないと思っただからだ。

次の瞬間、黒煙の中からビーム・ザンバを振りかぶった、ABCマントを失った全身装甲状態のISが現れた。

「なっ」

「終わりだ!!」

シュゴオオオオ

頭部のマスクが展開して放熱される。

セシリアには、まるで悪魔が笑ったように見えた。

「ひっ!!」

ビーム・ザンバーでセシリアを切り付けた。

とっさにセシリアが出した近接用武装をもともせず切断しシールドバリアのエネルギーを削られていくシールドバリアが完全に切り裂かれ、絶対防御が展開された。

「試合終了。勝者、鈴木勇」

アナウンスが俺の勝利を告げる。

俺は全身装甲状態を解除しながらセシリアを受け止めた。

「おっと」

セシリアを抱きとめると、彼女は暴れだした。

「ちょっと！何、抱きとめてるんですか！すぐに降りなさい！！」
「言われなくてもやってるだろ！！」

彼女を地上に降ろすと彼女は小さい声で何か呟いた。

「・・・とじ」

「へ？」

そう言って、恥ずかしそうに彼女はピットに走っていった。

「戻りますかな」

俺もピットに戻った。

デュエル TURN 1 VSブルーティアーズ（後書き）

今日の最強カードはこれABCマント

エネルギー射撃を受けるとマントの表面が蒸発してエネルギーを四散させる。

耐弾性は平均で5発。シールドを使わない分エネルギーを使用しないことが特徴だぞ。

設定（前書き）

遅すぎる気がしますけど設定です

設定

名前

鈴村勇（スズムラ ユウ）

愛称

ユウ

イメージ

DARKER THEN BLACKより 黒

性格

マイペース

静かに燃える熱血漢

趣味

IS改造

読書（漫画、IS雑誌、IS参考書）

料理

特徴

一夏より半年早くISが使えるようになったが、実戦経験は浅い。サナリィーに居たときは屋上で空を見上げることが日課だった。勘が強い。朝昼晩は、欠かさず食べる。

専用IS

名前

スカルハート

イメージ

クロスボーン・ガンダムX1

内臓武装

バルカン砲X2

フル・スキン
全身装甲時に使用可能

ビームサーベルX2

肩に内蔵されている。ビームバルカンとしての使用も可能

ヒート・ダガーX2

。緊急時や奇襲時に足の裏から拘束で射出することも可能。刀身だけを固定して敵を切りつける事が可能

シザー・アンカーX2

腰部前の左右に収納されている。敵の捕獲・拘束を目的とした武装。投げた武器を掴む。足場に打ち込み固定することもできる。

ブラインド・マーカー（ビームシールド）X2

両手に装備されている。ビーム刀を形成するビーム発信機。ビームの展開方法を変更することでビームシールドとしても使用できる。

スクリューウィップX2

腰部後ろ左右に収納されている。ドリル状の先端を高速回転させることで貫通能力を高めた鞭。

武装

ザンバスターX1

ビームピストルであるバスターガンと粒子加速式ビームサーベルであるビームザンバーの2種類の武装に分離する特殊武装。連結時はビームライフルとして機能する。先込め単発式でグレネードランチャーとしての機能を持ち各種弾頭を射出することができる

バスターガンX1

ビームピストス、威力はザンバスターに劣る。

ビームザンバーX1

粒子加速式ビームサーベルのビームザンバーは元々の出力が高い上に、ビームの粒子を縦方向に加速してさらに威力を高めており、結果、通常のISが装備するシールドごと、本体を斬り裂く事のできる威力を持つ。

NEW ビーコックスマツシャーX1

ABC (アンチ・ビーム・コーティング) マントX1

巨大な布状をした、対ビーム兵器用追加装甲。同一箇所へのビーム耐弾性能は、平均で5発。

e t c

特徴

近接戦闘に特化した全身装甲フル・スキンになることができるIS。背中に広がるX字のスラスタ^キー。頭部、胸部中央のドク口のレリーフ。全身装フル・ス甲展開時、膨大な熱を放熱する時は、頭部のマスクが展開されて放

熱する。

デュエル TURN 2 VS白式(前書き)

五話です

デュエル TURN 2 VS白式

セシリアとの戦いを終え俺はアリーナのピットに戻っていた。

「やりすぎだ!」

「すみません」

織斑先生はご立腹のようで、頭に角が生えている気がする。

「まーまー織斑先生。落ち着いて」

「そうですね、ISはしばらく使用不能ですがわたくしは、無傷だったのですから」

全身装甲モードで放ったビームザンバーの一撃はセシリアを傷つけなかったが、ISにダメージを与えたらしく、しばらく起動することができなくなってしまった。

「本当にすまない」

俺は深々と頭を下げる。

「分かりましたから、顔を上げてください」

「はい」

「まあ、今回はわたくしの負けを認めましょう。ですが次は負けませんわ」

あっさり負けを認めているくせに態度がでかいな。

「でも、あれは何なんですの?」

「あれは、全体的にISの性能を上げることが出来るシステムだよ」
「では、なぜ最初から使わなかったのですか？」
「あれを使うと機体が発熱するから長時間の使用はできないんだ」

ISの説明をしていると織斑先生が話しに割り込んできた。

「そんなこと、機密に関わること話していいのか？」
「いいんですよ。俺が作ったんですから」
「「「えっ！！」」」

俺の一言にピットにいたメンバー全員が驚いた。

「お前が作ったのかそのIS？」
「コアは篠ノ之さんのお姉さんが開発したものですけどね。それ以外は全部自分で作りました。」
「でも・・・F97って軍のトライアルに落ちたんですよね」

山田先生の一言は、俺の心に刺さった。

「近代のIS戦闘では」

5分経過

「ですから」
「もう分かったから」

その時、織斑先生が言った。

「後5分で鈴村のISの補給が終わるから二人とも準備しろ！」

「ハンデはいるか？」

「そんなの必要ないね!!！」

「なら、容赦しない!!！」

そんな話をしていると、補給が終了し俺たちはアリーナに向かった。

・
・
・

アリーナで俺と一夏は向かい合っていた。

「織斑くん、頑張って!!！」

「鈴村くん、頑張って!!！」

アリーナに出るとクラスの歓声が聞こえてきた。

「さあ、そろそろ始めるか？」

「ああ」

俺の言葉に一夏は答える。

「行くぞ!!！」

俺は右腕にビームガンバーを持ち、一夏に向かってスラスターを噴かした。

「来い!!！」

一夏は右手に雪片式型を持ち、俺に向かってスラスターを噴かした。両者はアリーナ中央でぶつかった。

激しい切り合い続いた。

切り合いの末、俺たちのシールドエネルギーは互いに一撃に耐えられるか耐えられないか、ぐらいつままで減らされていた。アリーナ内で戦っていた俺と一夏は再び距離を取った。

「はあはあ。まったく、初心者でここまでやるとは、思わなかったよ」

「はあはあ。俺も、ここまでやれると思わなかったさ」

俺は全身装甲モードを発動させる。

「これで、最後だ!!」

一夏は、零落白夜を起動させた。

「ああ、勝負だ!!」

互いに最初と同じように距離を詰めてアリーナの真ん中でぶつかり合い、次第に高度を上げていく。

そんな中、俺は一夏のクセに気が付いた。

左手を閉じたり開いたりしている。戦いを始めた時はそんなことは無かった。

「ふ・・・」

「？」

俺が浮かべた笑みに一夏が少し首を傾げた。

ピットでモニターを4人が見つめている。

「あの、馬鹿者。浮かれているな」

「えっ。どうしてわかるんですか？」

山田先生の質問に織斑先生が答えた

「さつきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵単純なミスをする」
「へええ……」

山田先生がそう言った時、モニターのに映るスカルハートの動きの変化に気が付いた。

「気づかれたようだな……」

「へ？」

二人はモニターを見つめた。

アリーナでは、一夏との小競り合いは5分にも続いていた。
互いにシールドに触れる事無く剣のみに攻撃が当たっていた。
そんな中、俺はわざわざビームザンバーを落とす。

「しまった!!」

一夏はそのチャンスを見逃さなかった。

「もらった!!」

一夏が放った斬撃をギリギリ回避する。

「残念だったな!!」

俺は前腰部左アーマーに装備されているシザーアンカーを使い落と
したビームザンバーをキャッチした。そのまま、体を翻し遠心力を
使い一夏を狙った。

「なっ」

突然の反撃に一夏は、何もできず、シールドバリアに命中した。

一夏のISシールドエネルギーは、底をつきISが解除された。
俺も一夏のISのシールドエネルギーが尽きた少し後にエネルギー
が切れ共に落下してしまったが、あまり高度が高くなかったため着
地することができた。

「はあはあ、負けたよユウ!」

「はあはあ、お前も初心者にしては異常なぐらい強いよ」
「試合終了。勝者、鈴村勇。」

アリーナにいるクラスの女子からの歓声が響いた。

「ピットに帰ろう。こういうのは、苦手だ」

「ああ」

俺と一夏はピットに戻った。

デュエル TURN 2 VS白式（後書き）

今日の最強カードは、シザー・アンカー

前腰右部アーマーに収納されている

主に敵の捕獲、拘束するシザース（ハサミ）になる

そのほかにも武器をつかむ、機体の固定など様々な場面で使われる。

一夏戦、最後に使った技は鋼鉄の7人最終巻のと同じような場面が載っています。

クラス代表決定！！（前書き）

6話です

クラス代表決定！！

クラス代表を決める戦いの翌日。

「では、1年1組のクラス代表は、織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね」

クラスが大いに盛り上がっている中。

クラスの中で一人だけ暗い顔をした男がいた。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

一夏が挙手している。納得がいかないんだろう。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは、鈴木くんが辞退したからです」

「ユウが？どうして？」

「俺、正直戦うの苦手だし。強い奴が出てても盛り上がらないだろ。」

一夏の疑問に答える。

「昨日あれだけの戦いしておいて、言うセリフか？」

「昨日は昨日、今日は今日だ」

「だったら、セシリアがやればいいじゃねえか？」

「わたくしのブルー・ティアーズは昨日の戦いでしばらく使えませんで、渋々、辞退してさしあげますわ」

実は修理は既に済んでいるのだが、俺がセシリアに頼んで一夏の奴に代表を譲るように頼んだのだ。

「まあ、そういう事だ。俺とセシリアと篠ノ之さんでちゃんと訓練してやるからな」

「そういう事だ、クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

クラス一丸となって返事をした。

・
・
・
・
・

一夏がクラス代表になってから数日がたったある日の放課後。

一夏のクラス代表主任パーティーを食堂でやることになった。

午前中は、授業中に一夏がアリーナに穴を開け、放課後は編入生らしい子を総合事務受付まで連れて行った。その子は、暗く負の感情が肌で感じられた。

「織斑くん、クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラッカーが乱射され、一夏の頭の上に乗っかっている。

まあ、見る限り一夏はおめでたくなさそうだ。

「それにしても・・・」

1組だけのパーティーのはずなのに人数が多いような。

まあ、盛り上がってるだしいいか。

「あらユウさんこんな所にいましたのね。織斑さんの隣に行かなくてよろしいのですの」

一夏から離れた所にいるとにセシリアが話しかけてきた。

「あいつの近くにいたら身が持たないよ」

「そうですか」

「セシリアこそ行かないのか？」

「わたくしは主役ではございませんので今日の所は、普通に振舞いますわ」

「今日の所は、か・・・」

この前の決闘が終ってからセシリアの態度が丸くなった気がした。

「おやおや、こんな所に専用機持ちのお二人が」

「「？」」

声のした方を見ると、見なれない女子がいた。

「私は二年のまゆみかおのこ黛薫子です。新聞部副部長をやってます。はいこれ名刺」

名刺を受け取り名前を見る。画数が多いな。

「期待の専用機持ちのお二人にインタビューをしに来ました。あ、もしかしてお邪魔でしたか？」

「そんなことないですよ」

二人だけでいた事を、勘違いしたのだろう。セシリアは少しムスッ

とした、

「では、二人と戦った感想をどうぞ。」

ボイスレコーダーが向けられる。

「セシリアに勝てたのは正直ISの性能だと思います」

「ほお、自分の力ではないと」

「はい、自分はまだISを起動させてから、間もないです。ですから技量と言うよりはISの性能のおかげですね」

「あたりまえですね。普通のISなら、わたくしが負けるはずありませんもの」

一夏よりは、ISを早く起動させているが実戦経験はまだこの前の2回だけだ。

「それで、一夏さんと戦ってみてどう思いました」

「初めてISで戦ったとは、思えないほどでしたね。一週間、篠ノ之さんと特訓したかいたったということですね」

「それでは、最後に織斑くんに何か一言」

「そうですね、まあ優勝目指して頑張って貰いたいです」

「はい、ありがとうございます。では、セシリアちゃんもコメントどうぞ」

こんどは、セシリアにボイスレコーダーが向けられる。

「コホン。ではまず、わたくー」

「ああ、ゴメンなさい。もう容量が無くなっちゃった。」

「そ、そんな」

「大丈夫、捏造しておくから。」

捏造は駄目だろ……。そう思っていると今度は、カメラを持った女子が近づいてくる

「は〜い、もっと二人とも寄って。」

「えっ」

意外そうな声を上げる。

「期待の専用機持ちだからね。ツーショット貰っよ。」

「そ、そうですね。……そう、ですわね」

モジモジしながら俺の隣に来る。

「どうかしたか？」

「どうもいませんわ」

セシリアは顔を少し赤くしていた。

「いいなあ〜」

「ずる〜い」

女子の声が聞こえる。

「撮るよ〜1+1は〜？」

「2」

「残念、田んぼの田でした」

なつかしいな。そう思っていると”パシヤ”と音が鳴り、シャッター

ーが切られた。

「じゃあ、次は織斑くんを入れて撮ろうか」

今度は、一夏を入れて三人で撮った。先ほどと同じようにパシャとシャッターが切られる。

すると今度はクラスのメンバーが全員、俺達の周りに集まっていた。

「集合写真になったな」

「そうだな」

「そうですね」

俺の一言に一夏とセシリアが同じタイミングで反応する。

「マネしないでくださらない！」

「別にたいした事じゃないだろう」

セシリアは一夏と同じタイミングで反応したことが相当、嫌だった様だ。

「ふん」

鼻を鳴らして、セシリアは何所かに行ってしまった。

一夏の就任パーティーは十時過ぎまで続いた。

クラス代表決定！！（後書き）

追記

誤字の指摘ありがとうございました

怒れるセカンド登場（前書き）

7話です

怒れるセカンド登場

次の日の朝。

教室で、隣のクラスに代表候補生が転入してくるといふ情報を聞いた。

昨日の負のオーラ全開の子だろう。

「そういえば、昨日あつたぞ」

昨日、会ったことを一夏に告げる。

「ん、どんな奴だった」

「えっと、あーあの子だ」

俺が指を刺す方向を一夏は見る。

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んねっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは、」

一夏とファン・リンイン 鳳鈴音と名乗る子のやり取りが続いていると、担任である織斑先生が現れる。

「おい」

「なによ！？」

バシッ！聞き返したファン・リンイン 鳳鈴音に強烈な出席簿の一撃が入る。

俺は180。反転して自分の席に向かう。

「あら、どこに行きますの?」

「ここにいると叩かれるからな」

一緒にいたセシリアの質問に答え席に向かう。

「それもそうですわね」

バシンバシンバシンバシン!!再び出席簿の一撃が複数聞こえた。

・
・
・

午前中の授業が終了した昼休み。

クラスメンバー数人と食堂に来ていた。

俺は食券販売機で、ラーメンとチャーハン大盛り、篠ノ之さんはきつねうどん、セシリアは洋食ランチの食券を買っていた。

「待ってたわよ、一夏!」

一夏が日替わりランチを買っていると、ファン・リンイン鳳鈴音が現れた。

俺達はファン・リンイン鳳鈴音をメンバーに加えテーブルに着いた。

聞く所によると彼女は一夏のセカンド幼馴染らしい。

「
」

俺はラーメンとチャーハンを交互に食べていた。

「それにしても、アンタの友達よく食べるわね」

ラーメンとチャーハン大盛りを食べている俺の方を見ながら言っ。

「いつもの事だ、見慣れたよ」

「それにしても、よく太らないよね鈴木くん」

「なんか、ズルい」

クラスの女子に言われた。

「あはははは・・・」

少し居心地が悪くなった。

その後、フラン・リンイン鳳鈴音は一夏に放課後の予定を無理やり約束してから食堂から出て行った。

放課後、一夏の特訓をするために第三アリーナに向かった。

「え？」

一夏は間抜けな声を出していた。

まあ、訓練用IS『打鉄』を装着した篠ノ之さんがいた。

「訓練機の使用許可、下りたんですね。」

「ああ、意外とあっさり下りたぞ」

先日、篠ノ之さん用に訓練機の使用を申請していたんだがこんなに早く下りるとは、思わなかった。

「では一夏、はじめるとしよう。刀を抜け」

「お、おっつ」

二人が訓練を始める。

本当はセシリアと特訓をする予定だったが、まあいいだろう。

「じゃあ、セシリア。俺の特訓に付き合ってくれ」

「え？」

「ほら、俺この前の戦いの時、お前の攻撃を回避できなかっただろう。あんじゃ、マントが何枚あっても足りないからな」

「そうですわね。では、わたくしが直々に特訓をして差し上げますわ」

「よろしくたのむ」

俺とセシリアは互いにISを展開して特訓を始めた。

日が傾き始め一夏たちの訓練が終了したことを確認して、俺たちも終了することにした。

「あら、織斑さんと同じピットに向かいませんの？」

「ん？あっちにいと、なんだか厄介なことに巻き込まれる気がするんだ・・・」

「そうですわね」

俺は一夏と反対のピットに向かうことにした。

・
・
・

夕食後、先ほどの4人で一夏と篠ノ之さんの部屋で今日の特訓の成

果を確認していると鳳鈴音ファン・リンインが部屋を訪ねてきた。
なんでも篠ノ之さんと部屋を代わって貰いたいらしい。

「幼馴染が二人もいるって大変だな」
「そうですね」

鳳鈴音ファン・リンインと篠ノ之さんが戦っているのを見ながら、俺は緑茶をセシリアは紅茶を一口飲んだ。

「ねえ、一夏。約束、覚えてる？」
「鈴、約束っていうのは」
「う、うん。覚えてる・・・よね」

一夏の事だどうせ覚えてな

「えーと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を」
「そ、そうっ。それ！」

お、珍しく覚えてー

「ーおごっってくれるってやつか」
「・・・はい？」
「はあ・・・」

一夏のまさかの答えにただ、ため息をつくしかなかった。
その後は、お分かりのとおり、鳳鈴音ファン・リンインは、一夏の頬をひっぱたいて、一夏に罵声を浴びせ出て行った。

「一夏、お前少しは考えるよ」
「織斑さん、最低ですわ」

俺とセシリアはそれだけ言って部屋を後にした。

・
・
・

翌日、『リーグマッチクラス対抗戦日程表』が張り出された。

一回戦の相手は2組のファン・リンヤン鳳鈴音だった。

クラス対抗戦（前書き）

8話です

クラス対抗戦

試合当日、一夏と鳳鈴音ファン・リンインの試合。

新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。

会場入りできなかった生徒や関係者はリアルタイムモニターで鑑賞している。

試合が始まり二人は動き出す。

一夏が展開した雪片ゆきひら式型は鳳鈴音ファン・リンインが展開した異形の青竜刀せいりゅうとうに阻まれる。

一夏は、距離を取ろうとしたが衝撃砲で殴り飛ばされてしまう。

「なんだあれは・・・？」

ピットからリアルタイムで見ていた篠ノ之さんがつぶやく。

「衝撃砲ですわね」

それに答えたのはセシリアだった。

その後、見えない衝撃砲をかわし続ける、一夏の姿がモニター映し出されていた。

しかし、一夏の顔は、次第に真剣な顔になった。

モニターに映る二人は少し言葉を交わして戦闘態勢に入った。

衝撃砲が放たれる前に距離を詰めていた。『瞬間加速イグニッション・ブースト』試合前、の

一週間で身に付けさせた技能だ。

一夏は雪片ゆきひら式型のバリア・無効化攻撃放つつもりだろう。

ズドオオオオンッ！！！！

ファン・リンイン
鳳鈴音のISに届く前に大きな衝撃がアリーナ全体を襲った。
そこにいたのは正体不明の異形の全身装甲フル・スキンのISだった。

「なんだ？」

モニターに映った異形のISを見ながら呟いた。

あの形状・・・無人機か！？すぐ横では山田先生が一夏たちに通信をしている。

さらに横では織斑先生はコーヒーに塩を入れていた。
相当、あせっている様だ。

「先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」
「そうしたいところだが、これを見る」

織斑先生は、手に持つ端末機を操作して画面を見せる。
そこには、アリーナのステータスチェックが映っていた。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・？しかも、扉がすべてロックされてーあのISの仕業ですの！？」
「そのようだ。これでは、避難することも救援に向かうこともできない」

織斑先生を見ると苛立ちが抑えられないとばかりに画面を叩いている。

「いや・・・方法は・・・ある」

その一言に、織斑先生とセシリアが反応する。

「先生！俺とセシリアにISの使用許可をください。」

「やれるんだな？」

「はい・・・必ず！」

真剣な顔で答える。

「いいだろう、鈴村、オルコットお前達にISの使用許可を出す。
あいつらを頼む」

「はい！！！」

俺とセシリアは無人の観客席に急いだ。

・
・
・

「で、どうしますの？」

無人の観客席に着いたセシリアが質問する。

「これを使う」

俺はISを全身装甲^{フル・スキーン}モードで発動する。

手には大型のランチャーを装備している。

「なんですか？それは？」

「試作品のバスターランチャーだ。こいつで遮断シールドをブチ破
る！！！」

「ムチャですわ。遮断レベル4なのですよ、そんな物で破れるわけ
」

「こいつの内臓エネルギーと俺のシールドエネルギーを85%込め
て打ち出せば理論上敗れるはずだ！！！」

「そんな・・・それでは、二人を助けられないんじゃない？」

「お前は何のために着いて来たんだ!!」

俺の大声に一瞬セシリアが一瞬怯む。

「時間が惜しい。やるぞ」

「はっ、はい!!」

遮断シールドに狙いを定める・・・さらにその狙いはあの異形のISにも定める。

成功確立47%か・・・分が悪い・・・失敗したら篠ノ之さんと織斑先生に叩き切られるな・・・

「だが、分の悪い賭けは嫌いじゃない!!」

そう言って、バスターランチャーのトリガーを引いた。

バスターランチャーから放たれたビームは遮断シールドにヒビを入た。

貫通した。

ビームは異形のISに命中しISの右腕を消し炭にする。

「セシリア!!」

「わかってますわ!!」

セシリアはブルー・ティアーズの四機同時狙撃で敵ISを打ち抜く。

「ギリギリでしたわ」

「お前達ならやってくれると思ってたよ」

一夏は確信があったように答えた。

「一夏！お前たちのせいで試作品が駄目になっちまったぜ！」

限界出力を出したバスターランチャーは火花を上げている。

「当然ですわ！何せ、わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから」

俺たちはプライベートチャンネルで思い思いの言葉を言った。すると、微かだが敵ISが動いたように見えた。俺はスラスターを噴かして一夏の所に向かう。

「ちょ！ユウさんどこー」

「ふう。何にしてもこれで終わー」

残った左腕で最大出力形態バースト・モードに変形させた敵ISが地上から一夏たちを狙っていた。

俺は、両腕のビームシールドを最大出力で発動させ一夏の前に出る。次の瞬間、迫り来るビームを最大出力のビームシールドで受け止める。

「ユウ！？」

「ぐっ！」

10秒に満たないビームの照射時間がとても長く感じた。
フル・スキン
全身装甲モードの使用可能限界時間はとくに過ぎているが強制解除はされない・・・そもそも、そんな機能はない。

シユゴオオオオ

頭部のマスクが展開して放熱される。

しかし、機体内部の温度は一向下がらない・・・下がるわけが無い。ビームシールドを最大出力で展開し、敵ISの放ったビームを受けているのだから。

敵ISのビームが止まり、シールドエネルギーを失った俺のISが強制解除される。

次の瞬間、後ろにいた一夏が敵ISに向かい敵ISに止めの一撃を刺していた。

俺は膝から崩れ落ちる。

「ユウ！」

「ユウさん！」

一夏とセシリアの声が聞こえる・・・。

俺は深い闇の中に入っていった。

クラス対抗戦（後書き）

今日の最強カードはバスターランチャー

実弾とビームをモード別で撃つことが出来るぞ

白銀騎士の槍オクスタンみたいな武器だな。

クラス対抗戦2（前書き）

9話です

クラス対抗戦2

「うっ……」

目を覚ますと、真っ白な天井が広がっていた。カーテンでベットが仕切られている。

ここは、保健室らしい。

「気がついたか？」

シャツとカーテンが引かれる。

そこには、織斑先生がいた。

「体に致命的な損傷はない、軽い脱水症状だ。ほら、これを飲め」
そう言つて、スポーツドリンクが渡される。

「ありがとうございます」

「まあ、何にせよ無地でよかった。家族を救ってくれたこと礼を言う」

織斑先生の表情は、普段見ることのできない柔らかかなものだった。

「そんな、当たり前前の事をしー」

グウウウゝ部屋の中にお腹の鳴った音が響いた。

「ふふふ……今日のところは部屋に戻っていいぞ。今から行けば夕食に間に合うぞ」

「そうですね」

織斑先生と入れ違いでセシリアが入ってくる。

「お、セシリアか飯行こうぜ」

「せっかくお見舞いに来て差し上げたのに、もう治ってるんですの。まったく、心配して損しましたわ」

「そいつはどうも」

そんなやり取りをしていると、一夏と鳳鈴音フヤン・リンインが入ってくる。

「もう起きて大丈夫なのか？」

「ああ、あとは、腹に何か入れれば全回復だ」

「じゃあ、食堂に行くか？」

「おう。あれ篠ノ之さんは？」

篠ノ之さんの姿が無い。

「あれ、さつきまで一緒にいたんだけどな」

「呼んで来いよ」

「わかった、先に食堂行っててくれ」

「ああ、待ってるぞ」

俺とセシリアと鳳鈴音フヤン・リンインは食堂に移動する。

・
・
・

・ 食堂 ・

「遅いな」

「遅いですわね」
「遅いわね」

待たされた俺たち3人は食堂の中で待っていた。すると携帯にメールが届く。

『筈が夕食作ってくれたから3人で食べてくれ』

あいつ・・・俺に説明させる気か？

「どうしたんですの?」

「いや、篠ノ之さんが見つからないから、先に食べててくれだって」「そう、ならしょうがないわね」

「それで、^{ノノ}鳳さんは一夏と仲直りできたんですか?」

「鈴でいいわよ。一夏とは、仲直りしたわ」

「それはよかった」

俺が寝ている中に仲直りしたんだろう。

「それにしても、今日は量が少ないのですね」

「寝起きだからな」

俺たちは雑談しながら夕食を取り、寮に戻った。

・
・
・

寮の廊下を歩いていると荷物を抱えた篠ノ之さんと山田先生がいた。

「二人とも、どうしたんですか?」

「引越ー」

「引越した!!」

山田先生が言う前に篠ノ之さんはそれだけ言って、横を通り過ぎていった。

「何かあったんですか？」

「先ほどからずっとあーなんですよ」

自室に戻って、眠りについた。

クラス対抗戦2（後書き）

フルクロスX2、X3などは出す予定でいます

美しき転校生（前書き）

10話です

タイトルの元ネタはSRWAより

美しき転校生

俺は朝から教室の机で寝ていた。

俺は昔の夢を見ていた。

1年前、まだ俺がISを起動できなかった頃。

オーティス主任の付き添いで俺はフランスのIS開発企業のパーティーに出席したときの記憶だ。

俺は主任にはれないように会場を抜け出し歩き回っていた、

しかも迷子状態だ。

そこでたまたま入った部屋の中で俺は、金髪の女の子に出会った。

「あ、もしかして迷子？俺もなんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺の名前は鈴木勇。君の名前は？」

「私の名前は」

その女の子が名前を言う前に現実に引き戻された。

「イテッ！」

白チョークが頭に命中した。

前を見ると『起きたか？』という顔をした織斑先生がいた。

机の下に落ちたチョークは碎けずに完全な形を保っていた。

「あとで返しにいこう」

そう、呟いてチョークを拾った。

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

話し手が織斑先生から山田先生に代わる。
何を話していたかは、あとで一夏に聞こう。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2名です！」

「ええええええっ!?!」

自分達の情報網をかくぐっていきなり転校生が現れたんだから驚きもする。
しかも2人。

「失礼します」

「・・・」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人シャルルはにこやかな顔でそう告げた一礼する。

学校で転校生なんて良くあることだ。だが事時ばかりは違った。だって転校生は男なのだから。

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああーっ！」

クラスの中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播した。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜！」

クラス女子一同は朝から元気なようだ。ほかのクラスが覗きに来ないのはホームルーム中だからだろう。

「あー騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

「……………」

当の本人は口を開かず、腕組みした状態で教室の女子達を下らなそうに見ていた。

「…………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

教官？ そういえば、たしか織斑先生はドイツで軍隊教官をやっていたはずだ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイト達の沈黙。

「あ、あの。以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが。

帰ってきたのは無慈悲な即答だけだった。

遠くから見ていると、一夏とラウラの目線が合った気がした。

いつも通りいやな予感がする。ラウラは一夏に向かってつかつかと歩き出した。

一夏の前に立った。

ラウラが手を振り上げたのを見てとっさに先ほどのチョークを投げつけた。

コツンッ、ラウラの頭に命中した。ラウラが放った平手打ちは空を切った。

「すみません。手が滑っちゃって」

「どういづつもりだ」

チョークが落ちた所に歩いて行き、チョークを拾いそれを黒板に置く。

「そのセリフ、そっくりそのまま返すよ」

ラウラとしばらく睨み合った。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

それだけ言ってラウラは戻っていった。

俺も席に戻ろうと後ろを向き歩いていると後ろに殺気を感じた。

Bannon! 俺は回避を試みたが追撃され食らってしまった。

後ろを振り向くと織斑先生が出席簿を構えていた。

思えばこれを食らったのは初めてだ。

「早く座れ」

「はい」

「ではホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う解散」

「鈴木、デユノアはお前と同じ部屋だ」

「はい？」

「忘れたのか、お前の部屋に今度、転校生が来たらお前が面倒を見ると言っただろう」

2ヶ月前の事だからすっかり忘れていた。

「まさかと思うが忘れていたわけではあるまい」

「そんな、ことはありません」

「では、任せたぞ」

「はい」

転校生の一人を任されてしまった。

美しき転校生2（前書き）

しばらく更新できないかもです

11話です

美しき転校生2

「最初は、グー、ジャン、ケン、ポン！」

俺と一夏はジャンケンをしていた。
これにはちゃんとした意味がある。

「残念だったな一夏、また俺の勝ちだ！」

「クソ、またかよ・・・」

結果 俺が勝ち、一夏が負けた。

「あのー君が鈴村君？始めまして。僕は」

「先に移動しよう。ここは女子がすぐに着替え始めるから」

転校生であるシャルルの顔はまるで初恋の人を前にしているように赤かった。

何故だ？そう思いつつシャルルの手を取って廊下に出る。

「とりあえず俺たちはアリーナの更衣室で着替える。実習のたびに移動するから慣れてくれ」

「う、うん」

さっきより顔が赤くなっている。

「一夏、行け！陽動だ！」

「なあ、シャルルがいるんだから、もう一回やるつぜ」

「転校生にそれは可哀相だろう。黙って行け！」

一夏は廊下を走って行った。

一夏を見つけた女子が大量に後をついていくことを確認して走ってアリーナに向かった。

ちなみに陽動役になったら最短ルートを通らないでアリーナに向かわなければならぬ。

一夏の陽動もありあまり女子に見つからないでアリーナの更衣室に来ることができた。

「鈴村勇だ。ユウって呼んでくれ」

「うん。知ってるよ、よろしくユウ。僕の事はシャルルでいいよ」

知ってる？新聞に出てるくらいだからな、知ってて当然か。

「わかった、シャルル」

ドドドドドド!!遠くで轟音が聞こえる。

一夏がまだ逃げているんだろう。

「そうだ、すぐに着替えないと。時間がヤバイ!」

俺は制服のボタンを外して制服を脱いでいく。

「わあっ!!!」

「どうした？忘れ物か？」

「な、なんでもないよ」

「そうか」

「着替えてる内はあっち向いてて・・・ね」

「????? ああ」

背中に視線を感じる。

「シャルル？」

「な、何かな!？」

後ろを見るとシャルルはISスーツのジッパーをあげていた。

「着替えるの早いな」

「う、うん。ユウのスーツ珍しいデザインだね」

「ああ、そうだな」

俺もISスーツのジッパーをあげた。

「さすがデユノア社製のスーツだな着やすそうだ」

「うん、ほとんどフル・オーダーだよ」

デユノア社・・・そうだとオーティス主任の付き添いで行ったフランスの企業の名前だ。

「はあはあはあ」

一夏が息を切らしながら入ってきた。

「やっと来たか」

「ん、ああ」

「先行ってるぞ、一夏」

「ああ」

アリーナの更衣室をシャルルと共に後にする。

今日は格闘及び射撃を含む実戦訓練をするらしいが、その前に代表候補生であるセシリアと鈴が戦闘の実演をするらしい。しかも相手は山田先生だ。山田先生は昔、代表候補生になったことがあるらしい。

2対1という不利な状況だが山田先生の圧勝で勝利した。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩きながら織斑先生が言った。

「専用機持ちは、織斑、鈴村、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、^{フアン}鳳だ。では8人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな、では分かれる。」

・
・
・

「では、午前中の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では、解散！」

訓練機を格納庫に戻して一夏とシャルルを探していた。

「シャルル、着替えに行こう。俺たちは更衣室にまで行かないといけないしな」

「え、ええっと・・・僕はちょっと機体の微調整してからいくから、先に行つてて着替えててよ。時間かかるかもしれないから、待つてなくていいからね」

「そうか、じゃあ一夏と先に行つてるよ」

「うん」

俺は一夏を捕まえて更衣室に向かった。
俺はスーツの上から制服を着て一夏が着替え終わるのを待ってから
更衣室を後にした。

「どういうことだ」
「ん？」

篠ノ之さんの疑問に一夏が答えていた。
今日は天気がいいので屋上で昼食を食べることにした。

「ほら、セシリアお前の分」
「ありがとうございますわ」

右隣にセシリアにお弁当を渡す。
何故作ったか？そんなこと決まっている、この前の休みに手料理を
ご馳走になって俺は倒れたからだ。
まるでボルシチに味噌とココアパウダーを入れたものを食べた味だ
った。

見た目は、良かったんだがな見た目は……。

「シャルルには、俺のを半分やろう」

自分用に使った中の1つを左隣のシャルルに渡す。

「いいの？」

「あと、3つあるからな」

「3つも!？」

今日はお弁当のタッパー4つだ。
学食に換算すると日代わり定食ご飯大盛りぐらいだろう。
3つになったことでご飯普通になったがな。

「いつもの事ですわ」

「いつも？」

驚くシャルルを見ながら俺は別のことを思っていた。

シャルルが今日の朝の夢にでた女の子に似てと思っていた。

でもシャルルは男だし。それに、彼女の名前・・・なんだっけ？

「珍しく箸が止まっていますがどうかいたしました？」

セシリアが箸が止まっている俺を珍しく思い質問してきた。

「ん？少し考え事をな」

「何をお考えですか？」

「昔、会った女の子の名前が思い出せなくてな・・・」

ん・・・なんだか地雷を踏んだ気が・・・。右から負のオーラを感じる。

「誰ですか？」

負のオーラ全開で聞いてくる。

「いや・・・その・・・昔、パーティーに出た時に会った女の子の名前だよ」

「えっ!?!?」

なんで、シャルルが反応するんだ。

「でも朝、夢で見ただけだから、もしかしたら夢かも知れないし・
・な」

「夢なら仕方ありませんわ」

「ーじゃないのに」

シャルルが小さい声で何か言った。

「シャルル、何か言ったか？」

「な、何も言っていないよ」

「そうか」

「それにしてもおいしいね」

「そうですわね」

シャルルとセシリアが弁当を食べた感想を言う。

「どれどれ。うー！アンタもなかなかやるわね」

鈴におかずを取られた。

大切に残しておいたエビフライを。

「一夏！酢豚をよこせ」

そう言っつて、一夏のタッパーから酢豚を奪った

「あ！それは一夏のために作ったんだから！」

「取っつていいのは、取られる覚悟のある奴だけだ」

どこの主人公のセリフに近いことを言う。

「それにしてもなかなか、うまいじゃないか。今度作り方を教えてくれ」

「いいわよ。その代わりに日本食を何か教えなさい」

「ああ」

その後も、雑談しながら食事を楽しんだ。

美しき転校生3 (前書き)

12話です

美しき転校生3

「改めてよろしく」

「うん。よろしく、ユウ」

その日の夜。

夕食を終えてシャルルと共に部屋に戻ってきた。

今は食後の休憩をかねて俺が入れた日本茶を飲んでいる。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。不思議な感じ。でもおいしいよ」

「そうか、気に入ってもらえて何よりだ。今度、知り合いに別の物も頼んでおくよ」

今入れた日本茶はミューラさんの今月の仕送りに入っていたものだ。ミューラさんは毎月決まった日に仕送りを送ってくれる。

中には手紙、お茶、日用雑貨品などが入っている。

「そつだ、今度の日曜日にも出かけないか？この辺案内もできるしな。」

「本当？嬉しいなあ。ありがとう、ユウ」

柔らかな微笑を浮かべるシャルルに、俺は夢で見た女の子が重なって、一瞬ドキッとしてしまう。

「なあ、シャルルって姉か妹いるか？」

「姉か妹？いないよ」

「じゃあさ、変なこと聞くようで悪いんだけど、シャルルって女装趣味とかあるか？」

「へっ？」

ギクツという反応をした。

「いや、深い意味は無いんだ。その、ほら昼に俺が見た夢の話した
だろう、その時の夢に出た女の子がシャルルにそっくりだからさ」

「そ、そうなんだ」

「ゴメンな変なこと聞いちゃって」

「う、うん……」

気まずい沈黙がしばらく続いた。

「え、えーとシャワーの順番どうする？その日その日で決めてもいいが」

「あ、僕が後でいいよ。ユウが先に使って」

「いいのか？シャルルだって先にシャワー浴びたい日があるだろう？」

「ううん、平気だよ。僕ってあんまり汗をかかない方だから、すぐにシャワー浴びなくてもそんなにきにならないし」

「そっか。じゃあ、ありがたく使わせてもらおうよ。でも先に浴びたい日は、言ってくれ譲るから」

「うん。ありがとう」

再び微笑みを浮かべるシャルルに、先ほどと同じようにドキツとしてしまう。

やはり彼は……。

「そういえば、ユウはいつも放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの」

「ん、俺がつて言うより一夏のためかな。あいつはみんなと違って遅れてるからな。まあ俺も人の事、言えないけどね」

今日はシャルルの引越しがあったから特訓は休みにしたのだ。

「僕も加わってもいいかな？何かお礼がしたいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「いいんじゃないか。ぜひ頼む」

「うん。任せて」

「そうだ俺、ちょっと電話してくる」

「電話？どこに？」

「ほら、仕送りをしてくれてる知り合いにお礼の電話しないと。あ、先に寝てていいから」

「うん、わかった」

俺は部屋を出て寮の外に移動する。

携帯を取り出し、ミユウラさんに電話をかける。

「こんばんわ、ユウです。いつも仕送りありがとうございます」

「いいのよ、そんな事。それよりどうかしたの？こんな時間に電話かけてくるなんて」

「調べてもらいたいことがあるんです」

「調べてもらいたいこと？」

「デユノア社の経営状況を調べてもらいたいんです」

「デユノア社？どうしてそんなことを」

「はい。それは」

俺は今日起きたことを説明しながら話した。

「そう、分かったわ。できるだけ調べてみる」

「よろしく願います」

携帯を切り自室に戻った。

「まだ起きてたのか」

「うん、それにしても長かったね」

「ああ、最近ずっと会ってないからな」

「そうなんだ」

「それより、もう寝よう。明日もあるし」

「そうだね」

「おやすみ、シャルル」

「うん、おやすみ。、ユウ」

ベッドに入り、しばらくして俺はぐっすり眠った。

外見より中身で勝負(前書き)

13話です

外見より中身で勝負

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんフアンに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」

シャルルが転校してきてから5日が経って、今日は土曜日だ。

土曜は午前理論学習、午後は完全自由になっている。

土曜はアリーナが前開放なのでほとんどの生徒が実習を行う。

それは俺たちも一緒に、今日はシャルルが一夏と手合わせした後、IS戦闘に関するレクチャーをしていた。

「それにしても、そのISはなんですか？」

セシリアが俺の状態を見ながら言う。

今の俺の状況は全身装甲ISフル・スキムを展開している。

しかし、展開しているのはスカルハートではない。

上半身が不恰好で一言で言えば格好悪いISである。

「ああ、これか？これはサナリイで開発中の作業用ISだ。こいつで、人が入ると危ない場所の工事とかする時に使うように設計されている。しかも、コストをかなり抑えたためこんなボディになったんだがな」

「もう少し、見た目を重視したほうがよろしくてよ」

「そうだな、開発部に言っておくよ」

「それにしても、下半身はあなたのISと同じですね」

「あまったパーツを使ったらしいからな」

おれがどうしてこんな格好をしているのかというと。

3日前、ミューラさんに頼んでおいたデュノア社の情報が入った。

「経営危機？でもあそこは量産機ISシェアが世界第三位だろ？」

「そうなの。でもね、結局は量産中のISは第二世代型、最近のISシェアでは第三世代型の開発が急務なの。フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除外されているから資金面に問題があるの」

「なるほど、第三世代の開発に遅れているわけか」

「話を続けるわ。その後も第三世代IS開発をしていたデュノア社だけど、第三世代IS開発に必要なデータも時間も圧倒的に不足していて、なかなか形にならなかったのよ。それで、政府からの予算の大幅カット。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合援助を前面カット、その上でIS開発許可も剥奪する流になっているらしいわ」

「そうですか・・・」

俺が少し間をおいていると話が続いた。

「それと、余計な事かもしれないけどデュノア社の社長にいままで息子がいたという情報は、見つからなかったわ」

「え、それってどういうことですか」

「あまり表立った発表はなかったってことよ、でもね、面白い情報もあるわよ」

「面白い情報？」

「そうなのよ。ネット上の噂なんだけど、なんでも社長と愛人の間に女の子がいたらしいの」

「女の子？」

「そう、なんでも2年前ぐらいにデュノア社に引き取られたらしいのよ」

「女の子・・・か」

「余計なことだったらごめんなさいね」

「いえ、役に立ちました。ありがとうございます」

「そう、ならいいんだけど。じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい、ミューラさん」

電話を切り少し考えた。

もしも、シャルルが女の子だと仮定して。

なぜ男装してIS学園に来たのか・・・。

答えは簡単だ、ISの情報。しかも男装しているからには、狙いは

一夏と俺の使用機体と本人のデータ取り・・・か。

「まあ・・・確証があるわけじゃないし」

でも、あいつがデータを取っているように見えないしな。
少し用心しておくかな。

で、現在に至る。別に疑っているわけでは、ないが少し用心しておいた。

「ねえ、ちよつとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

アリーナ内のざわめきに気づき、顔を上げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボー
デヴィツヒだった。

「おい」

ISの開放回線オーブン・チャンネルで声が飛んでくる。

「・・・なんだよ」

一夏が返事をすると言葉を続けながらラウラがふわりと飛翔してき
た。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様になくても私にはある。貴様がいなければ教官が大会二連覇
の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴
様を・・・貴様の存在を認めない」

「また今度な」

「ふん・・・ならば戦わざるを得ないようにしてやる!」

ラウラの漆黒のISは戦闘状態へシフトさせる。刹那、左肩に装備
された大型の実弾砲が火を噴いた。

「!」

ゴガギンッ!

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツ
の人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットな
のかな?」

「貴様……」

横合いから、割り込んできたシャルルがシールドで実弾を弾き、同時に右腕の六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開してラウラに向けていた。

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな」
「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代ルキよりは動けるだろうからね」

お互いに涼しい顔をして睨み合いが続く。俺はシャルルの前にでる。

「ユウ？」

「シャルル、ここは俺にやらせてくれ」

「貴様が？そんな無様なISでか？」

「見た目で判断すると痛い目にあうぞ」

こっちは、不恰好な装甲で覆われていて顔が見えていないが先ほどと同じように睨んでくる。

「その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え」

突然アリーナにスピーカーから声が響く。

騒ぎを聞きつけた担当の教師だろう。

「……ふん。今日は引こう」

横やりを二度も入れられて興が削がれたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへ去っていく。

「一夏、大丈夫？」
「あ、ああ。助かったよ」

シャルルは先ほどまでの鋭い眼差しから、いつものように人懐っこい顔で一夏の顔をのぞき込んでいた。

「今日はもうあがるっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしな」

「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」
「それなら良かった」

一夏とシャルルが会話している横で、俺はラウラが向かったアリーナゲートを見つめていた。

「ユウ？どうしたの」
「ん？ああ、なんでもない」
「そう。えっと、じゃあ一夏と先に着替えて戻って」
「たまには一緒に」
「行くぞ、一夏」

一夏が言い終わる前に一夏を更衣室に押していく。

「でもー」
「でもじゃない。本人が嫌がっているんだから行くぞ」

「なあ、ユウ」
「ん？」

更衣室で着替えていると一夏に質問された。

「どうして、シャルルは俺たちと一緒に着替えないんだ？」

「さあな、フランスでは、一緒に着替えたりしないんじゃないか？」

「そうかなあ？」

「どうでもいいさ・・・」

シャルルが転校してきたから一緒に着替えたのは転校初日の時一度きり、以後は前もってESスーツも着ていたり、俺達より早く行って着替え終わっていたりだ。

「はー、風呂に入りてえ・・・」

「そうだな」

男子が三人になったことで山田先生が大浴場のタイムテーブルを組み直してくれているらしい。

「あのー織斑君と鈴村君とデュノア君はいますかー？」

「はい？織斑と鈴村だけいます」

ドア越しに山田先生の声がする。

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

「大丈夫ですよ、二人とも着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシユツとドアが開いて山田先生が入ってくる。

なんでも今月の下旬から男子は週に2回大浴場が使えるようにしてくれたらしい。

一夏が感動のあまり山田先生の手を握っていると後ろから声が聞こ

えた。

「一夏にユウ？何してるの？」

ドキッ！一夏がすぐに反応して後ろを振り向いた。

そこにはシャルルがいた。

これが篠ノ之さん又は、鈴だったら今頃、制裁が入っていたところだろう。

「まだ、更衣室にいたんだ。それで一夏はなんで先生の手を握ってるの？」

「あ、いや。なんでもない」

一夏が握っていた手を離す。

山田先生もシャルルに言われて急に恥ずかしくなったのが、一夏から開放されると同時にくると回転して背中を向けた。

「二人とも先に戻ってって言ったよね」

「お、おう。すまん」

「あ、ああ。すまない」

俺と一夏はシャルルの放つ威圧感に負け頭を下げた。

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

一夏が朗報を伝えたにも関わらず、儀機嫌ナナメに見えた。

その後、一夏は白式の正式（白くやくび）に登録するため山田先生と共に行ってしまった。

「じゃあ、先に戻ってるから」
「うん、わかった」

俺は更衣室を後にして寮に向かった。

真実（前書き）

14話です

真実

シャワーを浴び、シャワールームを出るとベッドに腰掛けたシャルルがいた。

「シャワー開いたぞ」

「う、うん。ありがとう」

シャルルは少し暗い顔をしながらシャワールームに向かっていた。俺はしばらくベッドに腰掛けながらシャルルのことを考えていた。最近のシャルルの行動がおかしいと感じていた。

俺が見ている限りIS実習中はかなり親しげに接してくるが部屋ではぎこちない状態に変わる。

そんなことを考えていると携帯が鳴った。

ミューラさんからだ。

「ユウくん？ビッグニュースよ」

「ビッグニュースですか？」

「そう、例の愛人との間にできた子の名前だけど」

「分かったんですか!？」

「ええ、分かったわ」

「それで、名前は」

「シャルロット」

「シャルロット!？」

五日前に見た昔の夢の内容を思い出す。

「俺の名前は鈴木勇。君の名前は？」

「私の名前はシャルロット。シャルロット・デュノアよ」

そうだ、思い出したぞ。1年前のデュノア社のパーティで彼女に会ったんだ。

シャルルに、いやシャルロットに……。

「ユウくん、聞いてる？もしも〜し」

「あ、すいません。少し考え事を。あはははは……」

「そう？じゃあ、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

俺は電話を切って、少し考えた。

どう切り出すか……タイミングがなあ〜。

そんなことを考えているとシャルルがシャワールームから出てきた。

「すっきりした。ユウ？どうしたの、深刻そうな顔して」

「ん？いや、なんでもない」

「そう？そうには、見えないけど」

「大丈夫だよ」

「そう……だね。お茶入れるよ」

後ろを向いたシャルルに対して、俺は思い切って名前を呼んでみることにした。

「シャル……ロツ……ト？」

「え!？」

その名前が呼ばれると思っていなかったシャルルが驚いて振り向く。

「やっぱり、そうなんだな」

「やっぱり、バレてたんだ。最近電話してたのは、私の情報を聞いてたんだね。」

「そうだ・・・すまない」

「謝らないでいいよ・・・悪いのは僕なんだから」

「・・・・・・」

気まずい沈黙が続いた。そんな中シャルロットが話し始めた

「もう、知ってるよね。デユノア社の状況は」

「経営難で次のトライアルに第三世代型ISを出せないとまずいんだろ」

「さすがだね、ユウは。じゃあ、僕が男装してこの学園に来た理由も分かっているんだよね」

「俺と一夏に近づいてISの情報と本人データの入手って所だろう」
「本当にすごいな・・・ユウは」

いつものシャルルの声ではない、とても暗い悲しい声だった。

「最初はすぐに見破られると思ったんだけどね」

「まったく分からなかったよ」

「ユウ、キミはね僕にとって白馬に乗った王子様だったんだよ」

「俺が白馬に乗った王子様!？」

「うん、あのパーティーの日。本妻の嫌がらせでねパーティー会場に連れて来られたんだ」

「そうか・・・」

「あの部屋でパーティーが終わるまでそこにいなさいってね・・・」

「そこに、俺が来たわけか」

「うん、その時思ったんだ、この人なら僕を暗い闇の中から明るいところに連れてってくれるって」

「……………」

俺はシャルロットの言った事に掛ける言葉が見つからなかった。

「聞いてくれて、ありがとう、なんだか話したら楽になったよ。それと、今までウソをつけていてゴメンね」

「シャルロット、お前はこれからどうするんだ？」

「僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「既得事項第二一だ！！」

「えっ！？」

突然の俺の言葉にシャルロットが驚く。

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

一夏の勉強のために10回以上言わされたからよく覚えている。

「この学園にいるかぎり3年間は安心だろう。この3年間でお前の進む道を探せばいい」

「ユウ」

「ん？なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項五十五個もあるのに」

「一夏に散々繰り返し教えたからな。今じゃ、一字一句間違えずに言えるよ」

「ふふっ、そうなんだ」

やっと笑ったシャルロットの顔はいつもと変わらない微笑だった。

「まあ、決めるのはシャルロットなんだからな。それと良かったら俺と一緒にサナリイに来て働かないか」

「へっ？」

「いや、深い意味はないぞ。俺はISの開発をして、お前がISのテストパイロットしてくれば良いかなと思っただけだからな」

「う、うん。でも、ありがとう」

「ユウさん、いらっしやいます？夕食まだ取られてないようすけど体の具合でも悪いのですか？」

ドアの向こうから声が聞こえる。あのしゃべり方はセシリアだろう。

「セシリアかこれから行こうと思っただころだ」

「そうですね。では一緒に行きましょう」

「すまない。俺は、織斑先生に少し用事があるから俺は後で行くよ」

「そうなのですか残念ですわ。では行きましょうかデュノアさん」

「えっ？う、うん」

俺はシャルロットたちが食堂に向かったのを確認してから電話をした。

「オーティス主任ですか？頼みたいことがあるんですけど」

・
・
・
・

「なんだと！！お前は自分が何を言っているか分かっているのか！！」

「わかってますよ・・・どれほど重大なことも」

「お前の作った最高傑作なんだろう」

「でも、それを捨てるだけの価値はあります」

「・・・」

「それでは、お願いします」

「分かった。後悔するなよ」

「はい」

電話を切って、織斑先生がいるであろう寮長室に向かった。
その日、俺は部屋に戻らなかった。

学年別トーナメント!?(前書き)

第15話

学年別トーナメント!?

俺は今、フランスのデュノア社の前に来ている。

俺はあの後、織斑先生にサナリイに呼び出されたとウソをつきIS学園から外出許可を取った。

(サナリイに連絡が行った場合うまく誤魔化してくれるように頼んである) そのあとサナリイの輸送船に便乗してフランスまでやってきた。

さすがに一人で行かすとマズイと思ったのだろう、オーティス主任がミューラさんを付き添いにくれた。

「1年ぶりかな? 鈴村勇くん」

「ハイ、おひさしぶりです。デュノア社長」

挨拶もそこそこに本題に入る。

「それで何かね、お願いとは」

「シャルル・・・いや・・・シャルロットのことです」

「使えない奴め、もうバレおったか。」

自分の娘を使えない奴だと。

俺は拳を握って耐えた。

「単刀直入に言います。彼女との縁を切ってください」

「ほお、それで我が社にどのような利点があるのかね?」

「ここに俺が開発した第三世代型ISのデータがあります」

そう言っつて、USBを取り出した。

それは開発中のF97の2号機データだ。

俺が昨日、オーティス主任に頼んで全てのデータを集めておいてもらった開発データと戦闘データだ。

しかし今はF97の2号機ではなくXN-X2として渡そうとしている。

「あなたが、取引に乗ってくれるなら、このデータを渡す」

「あんなモノになんの価値があるというんだ？」

パンツ！

俺は机を叩きながら言い放った。

「彼女はアンタの道具じゃない!!」

デユノア社長はへびに睨まれたカエル状態で震えていた。

「わ、わかった。キミの好きにしる」

「今の言葉、録音してありますからね。では、失礼します」

・
・
・

1時間後、デユノア社長は黒いスーツの男性に会っていた。

「例の物は手に入りましたか」

「ああ、アレを学園に入れれば必ず持ってくるというあなたの読みが当たりましたよ」

「あたりまえですよ」

「これで、融資をしていただけれるんですね」

男は笑いながらいった。

「はい。約束どおりこんな出来損ないの第三世代型のデータではなく、完成された第三世代型のデータと資金を融資いたしましょう。フフフ・・・」

「出来損ないか・・・しかし価値が在るんじゃないのかそのISには？」

「フフフ・・・それ以上何か言うようでしたら実力行使に出ても構わないですよ」

男は氷のような眼差しで社長を威圧した。

「な、なんでもない」

「では、これにて」

男はUSBをアタッシュケースに入れて社長室を後にした。

.....

「では、ミューラさん例の事お願いします」

「ええ、彼女がそれで良いならね」

「はい」

「じゃあね、ユウくん。体に気をつけるのよ」

「はい、ミューラさんもお気をつけて」

車で学園の前まで送ってもらい俺は手を振って見送った。

寮に向かって歩いているとアリーナの方で爆発音が聞こえた。

アリーナに入るとセシリアと鈴を抱えて^{イグニッション・ブースト}瞬時加速を使って離脱している一夏の姿が目に入った。

俺はスカルハート（偽装モード）のままアリーナの中に入り、一夏

たちの前に踊り出た。

「ユウ、お前今までどこに行ってたんだ」

「ユウさん、いままでどこに」

「あんだ、どこいったのよ」

「ユウ、心配したんだから・・・後でお仕置きだからね」

一人だけなんだか黒いオーラが。

「いまさら、ザコが増えたところで」

そう言つて左肩に装着された大型の実弾砲が火を噴き俺に直撃した。弾が命中したことにより上半身の装甲にヒビが入った。

ヒビが不恰好な上半身全体に入り破片となって落ちていく。

中からマントを装備し、胸部中央にドクロのレリーフがあるISが姿を現した。

「なっ!?!」

「あれが、ユウのIS」

まだ俺のISを見ていなかったラウラとシャルロットが声を上げる。

「来いよ・・・!!」

「行くぞ・・・!!」

ラウラがまさに飛び出そうとした瞬間、俺たちの間に影が割り入ってきた。

ガギンツ!

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

一夏が声を上げる。だってその姿は普段と同じスーツ姿でISどころかISスーツすあ装着していない。

けれどその手に持っているのはIS用接近ブレードであり一七〇センチはある長大なそれをISの補佐なしで軽々と使っている。

「模擬戦をやるのは構わん。　　が、アリーナのバリアまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはISの装着状態を解除する。

「織斑、鈴村、デュノア、お前達もそれでいいな?」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答える。馬鹿者」

「は、はい」

「俺もそれで構いません」

「私もそれで構いません」

返事をし直す一夏に俺とシャルロットは追従する。

その言葉を聞いて、織斑先生は改めてアリーナ内すべての生徒に向けていった

「では、学年別トーナメントまで私闘をを一切を禁止する。解散!」

俺は今のうちに織斑先生の目の届かないところに逃亡を図ろうとするが。

「鈴村、帰ってきたようだな。話がある二人を保健室に連れて行ってら私のところに来い」

「は、はい」

二人を保健室に運んでから職員室急いで向かった。

「鈴村、来たか」

「は、はい」

俺はウソについて休んだことがばれたのと思いドキドキしていた。

「そう、緊張するな。」

「はい」

「先ほど、デュノア社から連絡があつてな、シャルロットとの縁を切るそうだ」

「は、はい」

「お前、どの程度関わっているんだ」

「な、なんの・・・ことです・・・か？」

緊張のあまり言葉が出ない。

「ウソつく練習をしろ」

「善処します」

「お前が直接デュノアに伝える良いな」

「お、俺がですか？」

「自分がやった事だろ責任を取れ。分かったら行け」

「わかりました。失礼します」

俺が保健室に来て数分後地鳴りを響かせながら女子が保健室に流れ込んできた。

「織斑君！」

「鈴村君！」

「デュノア君！」

「なな、なんだこれ！？」

「一夏なんかやったのか！？」

「ど、どうしたの。みんな・・・ちょ、ちょっと落ち着いて」

「」「これ！」「」

状況が飲み込めない俺たちに女子生徒一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うためふたり組でも参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者には抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』
ここまで読んだ時点で女子からストップがかかった。

「ああ、そこまででいいから！とにかくっ！」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組もうよ、鈴村君！」

「私と組んで、デュノア君！」

シャルルと女子を組ませるのは、非常にまずい。

それに一夏と組んでも正体がばれる可能性があるから非常にまずい。だったら・・・

「一夏、俺と組め。俺と一緒にセシリアと鈴が受けた借りを返してやるっぜ」

「ああ、良いぜ。一度あいつにギャフンって言わしてやる」

「悪いけど、俺と一夏は組むから諦めてくれ。あとシャルルもだ。シャルルがいないと一夏の訓練ができないからな」

しーん……。いきなりの沈黙、やっぱりまずかったか？

「まあ、そういうことなら・・・」

「ほかの女子と組まれるよりはいいし・・・」

「男同士っていうのも絵になるし・・・ごほんごほん」

とりあえず納得したようだ。

女子達は各自が仕方ないかと口にしながら、保健室を去っていった。

「ふう・・・」

「はあ・・・」

「あ、あの、ユウ・・・」

「一夏っ！」

「ユウさん!」

安堵のため息をついた俺にシャルロットが声をかけようとして、それを上回る勢いで鈴とセシリアがベッドから飛び出してきた。

「一夏、あたしと組みなさいよ！幼なじみでしょうが!」

「ユウさんクラスメイトとしてここはわたくしと!」

「けが人は寝てる、それにたぶんお前らのISはダメージレベルCを超えているはずだ。」

「そうですよ」

いきなり声をかけられて保健室にいた俺たち全員びっくりした。

「お二人のISは鈴村君が言ったとおりダメージレベルCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

これを聞いた二人は納得はしていないようだったが、トーナメントに参加できないことは理解したようだ。

俺たちはセシリアと鈴を保健室に残し寮に戻った。

衝撃（前書き）

第16話です。

衝撃

寮の部屋に帰ってすぐ、俺はシャルルの前で正座していた。シャルルは腕を組み、足で地面をタンタンと鳴らしていた。

「それで、どこに行ってたの・・・」

「フ、フランスに行ってみました」

「フランスに？どうして」

「デュノア社長に会ってお前との縁を切ってもらってきた」

先ほどまで聞こえていた足を地面を叩いている音が消えた。

「どうして・・・どうしてユウは、僕のためにそこまでしてくれるの」

シャルロットは肩を微かに震わせながら言った。

「お、俺はお前にとって白馬に乗った王子様だからな」

「答えになってないよ」

「そうだな・・・でも、後悔はしてないよ」

「・・・・・・」

長い沈黙だった。

「やっぱり、ユウは強引だな」

「そうとも、俺は強引で欲張りなんだよ」

「そうだね。1年前のパーティの時もそうだった。ユウは、僕の事をパーティ会場に連れてったんだよ。ダンスを踊ろうって強引にね。ダンスを踊ってる僕を見た本妻の驚いた顔、今でも覚えてるよ」

「……………」

「覚えてないって顔してるね」

「うっ……………」

気まずい沈黙が続くと思われた。

それをかき消すようにシャルロットが言った。

「別に覚えてなくても良いんだ。今の僕をこんなにも思ってくれる
ユウが居てくれるから」

よく見るとシシャルロットは目に大粒の涙を溜め込んでいた。

「シャルロットなk」

「シャ…………ル」

「へっ？」

「1年前…………ユウは、僕の…………事を…………シャルって…………呼
んでくれたよ」

「…………シャル泣くなよ。可愛い顔が台無しだぞ」

シャルを抱きしめ頭を撫でた。

「ユウの心臓の鼓動って結構早いね」

「ふ、普段こんな事しないからな。変な事、言うなら止めるぞ」

「言わないから…………もう少しだけ…………お願い」

上目遣いで頼んでくる。

「分かったから上目遣いで言うの止めてくれ」

「うん」

そのままの状態が5分間続いた。

「シャルもういいか？」

「……」

「シャル？」

抱きしめるのを止め、顔を覗き込んでみる。

「スー、スー、スー」

「立ったまま寝るのかコイツは……」

安心したのか、泣き疲れたのか、シャルの顔はとても気持ち良さそうだった。

「はあ、とりあえずベッドに運ぶか」

シャルをお姫様抱っこしてベッドに運び毛布をかけた。

「おやすみ……シャル」

シャルを起こさないように数回頭を撫で、シャワーを浴びベッドに入った。

「言っておくが添い寝じゃないぞって誰に言ってるんだ俺は」

誰に言ったのかを考えつつ眠りについた。

・
・
・
・

次の日のSHRにシャルは姿を見せなかった。
同じ部屋の俺の周りに一夏達が集まる

「なあ、ユウ」

「ん？」

「シャルルどうかしたのか？」

「なんでもクラスに爆弾を落とす支度しに行ったよ」

「『『『爆弾！？』』』」

「安心しろ。織斑先生公認だ」

そこに居た全員が頭の上に？を浮かべた。

午後

「み、みなさん、こんにちは……」

午後の授業のために山田先生が教室に入ってきた。
なぜだかふらふらしている。
まあ予想はつくが。

「みなさんに転校生を紹介します。転校生といいますが、すでに紹介は済んでるといいますか、ええと……」

クラスの全員が山田先生の説明が理解できず騒ぎ出す。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

クラスの何人かが聞いたことのある声に反応する。

「鈴村シャルロットです。改めてお願いします」

ペこり、スカート姿のシャルロットが礼をする。

俺を除くクラス全員がぼかんとした。

どうしてこうなったのかと言うと時間は朝までさかのぼる。

・
・
・

「昨日、お前が寝ちまったから言い忘れたが、お前さえ良ければサナリイの知り合いがお前の事を養子にしてくれるんだがどうする？」

「へっ？」

「お前さえ良ければだ。落ち着いて決めればいい」

「・・・僕、養子になるよ」

「決めるの速。時間はあるんだ落ち着いて決める」

あまりの速さにツッコミを入れてしまった。

「もう決めたの」

シャルの決意は固い様だ。

「じゃあ、来週にでも」

「今、会いに行く」

「い、いま？」

シャルの発言に驚く。

「善は急げっていうじゃない」

「そうだけど・・・分かったよ。連絡してみる」

俺はミューラさんに連絡をしてシャルとの待ち合わせ場所を決めてシャルは、午前中ミューラさんに会って養子になる手続きをして来て今に至るわけだ。

これでシャルロットは・デュノアはミューラ・ミゲルの姓をもらいシャルロット・ミゲルに・・・ん？

あいつ、・・・今、鈴村って言わなかったか。

「ええと、デュノア君は、デュノアさんでした・・・それとお家の都合で親と縁を切ることになり鈴村君の家に引き取られることになりました。ということですよ。はああ・・・また寮の部屋割りを組み立て作業がはじまります・・・」

「え？デュノア君って女の子・・・」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「て、鈴村君、同室だから知らなかったって事は」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クラスメイト全員から質問の嵐が巻き起こった。俺はただ啞然としていた。

「ユウ、どういことだ？」

「・・・・・・・・」

「ユウさん、どういことですか？」

「・・・・・・・・」

一夏とセシリアの声が遠くに聞こえる。頭の中がグニャグニャになり真っ白になった。

衝撃（後書き）

話がムチャクチャ？そんなの前からですよ。

嵐 近くを通り過ぎる（前書き）

第17話です

嵐 近くを通り過ぎる

「うっ……」

目を覚ますと、クラス対抗戦の時の戦いの後、運び込まれた保健室の天井だ。

「ユウ、気がついた？」

ベッドの隣で座っていたシャルが声をかけてきた。

「シャルか……」

「わたくしもいますわよ」

「セシリアもか……」

俺はどうしてここにいるんだ？

「どうしてここにいるかわからないって顔してるね」

「ユウさん、あなたはクラスメイト全員から質問攻めに合っている時に気を失ってしまったんですよ」

「この先生が言うには、とても衝撃的なことがあったんだろって」

「衝撃的な事？」

記憶をさかのぼる……たしかシャルが自己紹介して……鈴木シヤルロットって名乗って……。

「そっだ、シャルどうして鈴木を名乗ったんだ？ミューラさんの養子になったんじゃないかったのか？」

「あのね、ミューラさんに会って書類を書き終わったところに」

・
・
・
・
・

私は、書き終わった書類をミューラさんに渡した。

「うん、後はここに私の名前を」

「あら、ミューラちゃんじゃない」

「ユ、ユイさん!？」

長い黒髪の女性がいた。

「久しぶりね、元気してた？」

「ユイどうした？ お、ミューラくんじゃないか」

黒髪の男性がいた。

「大樹さんまで、どうしたんですか」

ミューラさんは二人を知っているようだ。

「久しぶりに日本に帰ってきたから息子の顔を見にな」

「あら、この子は？あ、もしかしてミューラちゃんの・・・」

「ち、違いますよ」

「あの、ミューラさん。この方達は？」

「ユウ君のご家族よ」

「えっ!?! ユウのお父さんとお母さん、なんですか!?!」

突然現れたこの二人はユウの母親と父親。

「鈴村結衣よ」

「鈴村大樹だ」

「シャルロットです」

自己紹介する。

「その制服、IS学園のよね」

「はい、ユウのクラスメイトです」

「ユウのクラスメイト？ どうして、あいつがIS学園にいるんだ？」

「えっ？ ニュースになったと思うんですけど？」

「新聞とかニュースとか見ないからな」

「「ねえ」」

二人は声をそろえて言った。女性にしか起動させることができないISを男性が起動させた、というは全世界に報道されている。

それを知らないのは、世間知らずもいいところだ。

「それで、何をしてたの？」

「ユウ君に頼まれて彼女を養子にすることになったんです」

「ユウに？ どうして？」

「色々あります・・・」

ミユウラさんが私に代わって説明しようとする。

「あっ！ ねえ、あなた。私、面白いこと思いついちゃった」

ゴニョゴニョ

「それは、いい」

「ね、いい考えでしょ!」

「それじゃ、ユウを驚かしてやるうじゃないか!」

二人は嬉しそうに書類を見つめていた。

「えっ!？」

・
・
・
・
・

「で、二人が書類にサインしたんだな」

「う、うん」

「驚かすというよりは、気絶さす、のほろが正しいのでは?」
「ま
せんか?」

「そうだね。アハハハハ」

シャルが笑った。

「あ、鈴木君。起きたんですね。体には異常がありませんからもう
部屋に戻ってもいいですよ」

「わかりました。山田先生ご迷惑をお掛けしました」

「そうですよ。これからは私の授業中に倒れないでくださいね」

それだけ言って山田先生は保健室を後にした。

「それで、おやじ達は？」

「ユウに会えないんじゃ、日本にいる必要ないなって言ってたよ。あ、そうだコレ」

手紙を渡された。中には『ドッキリ大成功!!』と大きく書いてあった。

「はぁ・・・」

「小さく何か書いてありますわよ。ほら、そこ」
「本当だ」

『ドッキリ大成功!!』の下に小さく『今度はエジプトに行ってきます』と書いてあった。

「はぁ・・・今度は、エジプトか」

「今度は、ってどういうこと？」

「この前は、オーストラリアだったかな。その前はチリ。その前は」

俺が続けようとしたらセシリアに止められた。

「お、お仕事は何を？」

「昔は父さんは、IS開発。母さんは元代表候補生だった」

「代表候補生!？」

二人が驚く。

「元、だけどな。今は探検家をやってるよ。自称だけどな」

「探検家ですか・・・」

「そんなことよりユウ、お腹すかない？」

時計を見ればあと40分で食堂が閉まってしまう。

「そうだな」

「では、参りましょう」

「参りましょうって、お前ら行ってなかったのか？」

「うん、ずっと起きるの待ってたんだよ」

「そうか、悪かったな・・・」

「いいんですよ。さあ、今度こそ参りましょう」

「ああ」

俺たちは食堂に向かった。

設定2（前書き）

設定2です

変更する可能性あり

設定 2

施設

サナリイ

S . N . R . I . : S t r a t e g i c N a v a l R e s e a r c h I n s t i t u t e , 正式名称：かいくんせんりやくけんきゅうじょ海軍戦略研究所

ISが出現するまで戦略兵器の開発をしていた。

フォーミュラー計画

高性能かつ低コストのISを目指した計画。

ハードポイントによる武装の追加パーツ方式を取り、完成したのがミツシヨン・パツク方式である。

フル・スキム全身装甲を採用することにより人が活動できない宇宙空間、水中での運用を目指している。

人物

オーティス主任

フォーミュラー計画の責任者。ユウの上司

鈴村ミユウラ

オーティスの助手。

鈴村結衣

主人公の母。日本の元代表候補生。現在は世界各地を父と飛び回っている。ユウは二人のテンションについていけない。

鈴村大樹

主人公の父。サナリイでIS開発をしていた。現在は世界を母と飛び回っている。一応まだサナリイの職員である。ユウは二人のテン

ションについていけない。

開発IS

F90

サナリイ初のISにして全身装甲ISである。フル・スキンミッシヨンパックシステムを採用することで様々な局面に対応することができる。

F91

元ユウの愛機。サナリイの元祖と呼ばれるIS。超高速戦闘に特化した。一時期量産機として出回ったがあまりの高性能に使いこなせるパイロットが少なかったため返品の嵐が巻き起こった。

F97 (XN-X) シリーズ

ユウが開発に関わったIS。現在は開発が凍結されている。白を基調とした1号機、黒を基調とした2号機が開発されている。1号機はユウが使用中、2号機はサナリイで完成後凍結処分。3号機は武装と内臓予定の新兵器の開発は終了しているが開発が凍結したことにより装備される予定だった武装と内臓予定の新兵器しか存在しない。

思い出の品（前書き）

第18話です

思い出の品

学年別トーナメント一週間前。

一夏とシャルは第二アリーナで訓練をしている。

俺はピットでミューラさんと待ち合わせをしていた。

訓練の見学に来ていたセシリアがすぐ横で腕を組んでいる。

「そろそろ来るはずなんだが」

「先ほどから何を持っているんですの？」

「俺の昔の愛機をね」

「？」

俺の一言にセシリアは首を傾げる。

「鈴村君、お客さんですよ」

「ユウくん」

「お、来たみたいだ」

山田先生に案内されて、手を振りながらミューラさんが入ってきた。

「お待たせしましたユウくん。はいコレ」

「ありがとうございます」

ミューラさんからブレスレットを受け取る。

「それってもしかしてISですか？」

「そうだよ。俺が始めて起動したISだ」

そう言いながら受け取ったISを起動させる。

白を基調とし、特徴的な胸の放熱フィン、右肩にF、左肩に91のマーキングがされたISがそこにいた。

「これは、サナリイの元祖と呼ばれるISじゃないですか」

「F91。サナリイが開発した超高速戦闘に特化したISよ」

「F91・・・」

セシリアはミューラさんの説明を受けていた。

「一夏、今から俺も行く。模擬戦をしよう」

「ん、ユウか。いいぜ」

「ちょっとユウくん、まだ最適化が^{フィットテイング}」

俺はアリーナに向かうためピット・ゲートに向かう

「じゃあ、行け。F91、鈴村勇出るぞ!!」

そう言ってピット・ゲートを出て、アリーナに向かった。

「ああ、行っちゃった・・・」

・
・
・

「なんだ!?!ユウそのISは」

「これか?これは学年別トーナメントで使うISさ」

アリーナに出て直ぐに言われた一夏の質問に答える。

「さあ、始めるか」

^{フィットテイング}

「おお、って最適化まだ終わってないんじゃないか?」

「お前にはこのぐらいのハンデが必要だろう」
「なんだと！その余裕痛い目見るぞ」
「だったら、勝って見せる」

二人はアリーの真ん中でぶつかり合った。
それはまるでクラス代表を決める戦いを思い出す戦いだった。

30分後

「はあ、また負けた」

「いやいや、あそこで最適化（フィッティング）が終了しなかったら危なかったよ」

「そうだよ一夏、結構いい線いってたよ。でもヤツパリ全身装甲フル・スキムになるんだね」

俺たちは模擬戦を終えピットに戻っていた。

「それにしても、最後に使ったアレ何だったんだ？分身したように見えたぞ」

「アレは」
「お疲れ様。ユウ君」

一夏に最後に使ったアレの説明をしようとした時ミューラさんが話しかけてきた。

「ミューラさん、すいません。待たせちゃって」

「いいのよ、ユウ君が戦ってる姿が見れて私も嬉しいんだから」

「アハハハハ」

ほめられて恥ずかしくなり、俺は誤魔化すように笑った。

「じゃ私、帰るから。シャルちゃんもまたね」

「ミユウラさんもお元気で」

「F・91ありがとうございます」

ミユウラさんを手を振って見送った。

・
・
・
・
・

一週間後、学年別トーナメント当日。

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

更衣室のモニターを見ていた一夏が声を上げる。
それに連れられる俺もモニターを見る。

「ん？たしかにすごいな・・・」

モニターには、観客席の様子が映し出されていた。

そこには、各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「俺たちには関係ないが3年にはスカウト、2年生には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるらしいからな」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「まあ、お前はラウラとの対戦だけが気になってるみたいだな」

「まあ、な」

代表候補生である鈴とセシリアがこのトーナメントで結果を出すどころか参加すらできないというのは、彼女たちの立場を悪くする要因になるだろう。

「自分の力を試せもしないっていうのは、正直つらいだろう」

一夏は左手を握り締めていた。

「感情的になるな。ラウラは、1年の中では現時点で最強だろう。冷静じゃないと勝てないぞ」

「ああ、わかってる」

「準備はできたか？」

「おう、いつでも行けるぞ」

お互いにISスーツへの着替えと最終チェックを終えた。

「そろそろ対戦表が決まるはずだな」

「1年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運が良いよな」

「ん？そうか？」

「待ち時間に色々考えなくても住むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たところ勝負、思い切りのよさで行きたいだろう」

「はあ、そうかもな。俺だったら1番最初に手の内を晒すことになるから、少し考えがマイナスになるけどな」

前々から思っていたが俺と一夏の考え方は正反対だ。

「お、対戦相手が決まったみたいだな」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。

「「・・・え？」」

出てきた文字に俺と一夏はぽかんと声をあげた。一回戦の対戦相手はラウラ、と篠ノ之さんだったのだ。

思い出の品（後書き）

どうしてF91を登場させたのかというと近接戦闘機体同士では戦いにくいと考えたからです。

学年別トーナメント VS シュヴァルツェア・レーゲン & amp; 打鉄 (前書き)

第19話です

学年別トーナメント VS シュヴァルツェア・レーゲン & amp・打鉄

第一試合会場。

会場内には4人がそれぞれISを展開していた。

「一夏、ラウラのISから妙な悪意を感じる・・・気をつけるよ」
「悪意？ ああ、分かった」

俺の一言に一夏は少し首を傾げていた。

「1戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「そりああなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合が始まる数秒前、一夏とラウラが言葉を交わしていた。

「叩きのめす」

「一夏とラウラは試合開始と同時に言葉をあげた。
一夏は瞬間加速で距離を詰めていた。」

「おおおっ！」
「ふん・・・」

ラウラが一夏に向かって右腕を突き出した。

AICを使う気だ。AICアクティブ・イナーシャル・キャンセラ
Iの略。

ISに搭載されているPICを発展させたもので、対象を任意に停止させることができる。

「くっ……！」

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりやどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

AICに捕まった一夏を目掛けて肩のカノン砲が向けられる。

「させるか！」

俺は一夏の頭上を飛び越えると同時に左手に装備したビームランチャーによる射撃を浴びせた。

「ちっ……」

肩のカノンを射撃によってずらされ、一夏に向けて放たれた砲弾が空を切る。

さらにたたみかける俺の攻撃にラウラが後方に距離を取った。

「逃さん!!」

俺は即座に銃身を正面に突き出した体勢へと移り、空いている右手にビームライフルを呼び出す。

光の糸が虚空で集まり、1秒とかならず銃を形成した。

シャル直伝の高速切替ラビッド・スウィッチである。

「私を忘れてもらっては困る」

ラウラへの追撃を遮るように打鉄を纏った篠ノ之さんが現れる。

俺の撃つビームを実体シールドで弾きながら俺に切りかかってきた。

「それじゃあ俺も忘れられないようにしないとな!」

ラウラのAICから開放された一夏が瞬間加速で接近してくる。
イグニッション・ブースト

俺と一夏はすばやくお互いの場所を入れ替え篠ノ之さんの斬撃を受ける。

一夏と篠ノ之さんの近接ブレードがぶつかり合って火花を散らす。

「くっ!」のっ・・・!」

一夏に徐々に押され焦れた篠ノ之さんが大きく刀を振りかぶる。

「ユウ!」

「おつよ!」

一夏はその一撃を受け止める。

一夏の後ろに控えていた俺は一夏の両脇から二丁の銃身を突き出す。

V・S・B・R・(ヴェスバー) このISの背中に直結する形で装着されている兵装である。

篠ノ之さんが青ざめているのがわかったが、もう遅い。俺は迷わず引き金を引いた。

「!?!」

目の前の篠ノ之さんが消え、V・S・B・R・(ヴェスバー)がむなしく空を切る。

「邪魔だ!」

「なっ、何をする!」

ワイヤーブレードを使って篠ノ之さんを遠くに投げ飛ばし、入れ替わるようにラウラが急接近してくる。

助けたと言うより邪魔だからどかしたというだけだったようだ。両手に展開したプラズマ手刀で連続で切りかかってくる。

「数の差で私が有利だな」

「たかが2倍じゃねえか！」

一夏は斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃に押されていた。

同時に俺に対してワイヤーブレードを駆使して俺を牽制して、俺と一夏の距離を離している。

「ユウ、大丈夫か？」

「お前こそ。一夏、このまま例の作戦で行くぞ」

「分かった」

プライベートチャンネルで短いやりとりを交わして、あらかじめ決めていた作戦へと移る。

ラウラに対して2対1の体勢をとるために先に篠ノ之さんパートナーを先に倒す作戦である。

「悪いな、一夏が相手じゃなくてさ。ついでにパートナーも取って悪かったな」

「なっ・・・！？バカにするなっ！」

ラウラの射程から離脱した俺は篠ノ之さんに向かって間合いを詰める。

俺の言った挑発で篠ノ之さんの頭に血が上り、近接ブレードを構えて突撃してくる。

俺はビームライフルを投げ捨て、ビームランチャーを腰の後ろにマ

ウントし、ビームサーベルを両手に展開する。
斬撃を2本のビームサーベルを交差させて受け腹部に内蔵されているバルカン砲で牽制する。

「訓練機だと思って気を抜いたか？」

「そうだな・・・少し気を抜いていたな・・・なら本気で行く!!」

俺は全身装甲フル・スキーンを起動させて一気に距離を詰める。

「貰った!!」

俺は篠ノ之さんが放つ斬撃を側転で避ける。

「なっ!？」

予想していなかった行動に声が漏れる。

俺は、先ほど投げ捨てたビームライフルを拾い、腰にマウントしたビームランチャーを構えバルカン砲と同時に連射した。

全弾命中して篠ノ之さんのISのシールドエネルギーを0にした。

「ハアハア、一夏は・・・」

「とどめだ」

ラウラの大型レールガンが照準を合わせ終えたのが目に入った。

一夏はワイヤーに白式の籠手が固定されて回避も迎撃もできないでいた。

「待たせたな!」

砲口から放たれた砲弾を展開したビームシールドで防ぐ。

そしてビームサーベルで白式を固定しているワイヤーを切断する。

「ユウ・・・助かったぜ。ありがとよ」

「貸しにしとくよ」

「筈は」

「あそこ」

シールドエネルギーを0にされた篠ノ之さんは悔しそうに膝をついていた。

「さすがだな」

「そついうのは勝つてからにしようぜ」

俺は、右腕のビームライフルを投げ捨て、V・S・B・R・（ヴェスパー）を装着する。

「ここからが、本番だな」

「ああ、見せてやるとしようぜ、俺たちのコンビネーションをな」

第二ラウンドの鐘が鳴った。

「一気に、これで決めるっ！」

一夏は零落白夜を発動させてラウラへと直進する。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・・・
それなら当たらなければいい」

ラウラはAICによる拘束攻撃が連続で一夏に襲い掛かる。
一夏はそれらを急停止、転身、急加速で何とかかわしてた。

「一夏！2時前方、突っ込め！」
「わかった！」

射撃武器でラウラを牽制しながら一夏の進む道を確保する。

「ちっ・・・小癩な！」

ワイヤーブレードをぐり抜け、一夏はラウラを射程圏内に収める。

「無駄だ。貴様の攻撃は読んでいる」

「普通に切りかかれば、な。それなら！」

一夏は切っ先を起こし、体の前に持っていく。

「!?!。無駄な事を!?!」

一夏の動きが止まる。A I Cの網が一夏の体を完全に固定した。

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められれば」

「俺を忘れるなよ!?!」

「!?!」

慌ててラウラが視線を動かすが手遅れだ。

ゼロ距離まで接近し左腕に展開したビームランチャーをすばやく連射した。

次の瞬間、ラウラの大口径レールカノンは轟音とともに爆散した。

「くっ・・・!」

「一夏!」

「おう！」

再度、零落白夜を構え直す。

「・・・！」

俺も一夏も勝利を確信した一撃だった。
だった、のだが

「なっ！ここにきてエネルギー切れかよ！」

「残念だったな」

その一言を言うとラウラは両腕にプラズマ手刀を展開していた。

「限界までシールドエネルギーを消費してはもう戦えまい！あと一撃でも入れれば私の勝ちだ！」

「させるかあ！！！」

「邪魔だ！」

援護に入ろうとする俺に対してワイヤーブレードが嵐の様に迫り来る。

「ちっ！」

「ユウ！ くっ」

「次は貴様だ！ 墜ちろ！」

「さ・・・せ・・・る・・・かあああ！！！」

リミッターが解除され最大稼動モードが発動する。

頭部のフェイスガードと各部位の放熱フィンの展開、及び装甲表面の「MEPE」（金属剥離効果）によって強制冷却が行われる。

俺は左腕にビームサーベルを持ちワイヤーブレードを切断しながらラウラに接近していく。

「なっ、なんだ!？」

その時、ラウラの目には俺のISがあたかも分身しているかのように見えていた。

「ぶ、分身しているのか・・・？」

これは、強制冷却時の副次的効果として、剥離した金属片が敵機のセンサーに認識されるために本機があたかも分身しているかのように見える。

センサーの誤認であるため観客から見ると先ほどよりスピードが増した程度に見える。

「だ、だが私の停止結界の前では無力だ!！」

そう言ってラウラはAIC発動体勢に移る。
次の瞬間動きが止まったのはラウラだった。

「!？」

いきなりあらぬ方向から射撃を受けラウラが視線を巡らせる。
そして目が合っていた。

俺が投げ捨てたビームライフルを構える一夏と。

「気がついてくれると思っていただぞ! 一夏!」

俺が投げ捨てたとき一夏に対して使用許可を出していたビームライ

フルなのだ。

それを使用するかは、一夏が気がつくかは賭けだったが。

「これならA I Cは使えまい！」

「こ、のっ……死に損ないがあっ！」

ラウラは命中率の高くない一夏の攻撃を無視して俺に集中することにしたのだろう。

A I Cの矛先が再び俺に向く。

「こいつ、残像全てに攻撃をしているのか!？」

残像が見えない何かに貫かれるのが見えた。本体である俺を捉えるのに時間はかからなかった。

右足の装甲にかする。

左腕のビームサーベルがA I Cによって弾かれる。

「なんとおおおー!!!」

ゼロ距離まで接近して右腕に装着したビームランチャーを構える。

「化け物かあああ!？」

シュゴオオオオ

構えると同時に再び頭部のフェイスガードが展開され放熱される。

俺はラウラとの距離を取りながらビームランチャーの引き金を引いた。

ビームが連射されると同時にラウラのI Sが強制解除の兆候を見せ始める。

だが次の瞬間、異変が起きた。

「あああああつ！！！！！」

突然のラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

同時にラウラのISから激しい電撃が放たれ、離脱しようとしていた俺を弾き飛ばす。

「っ！！ 悪意が強くなった・・・気をつける！！！」

「「なっ！？」」

俺と一夏は目を疑った。ラウラのISが変形したいた。

いや、変形などではない装甲をかたどっていた線はすべて溶けてどろどろになってラウラを飲み込んでいく。

「なんだよ、あれは・・・」

一夏が呟いた言葉はそれを見ていたであろう俺を含めた全ての人間がそう思ったに違いない。

学年別トーナメント VS シュヴァルツェア・レーゲン & amp; 打鉄 (後書き

ほぼ展開が同じなのは手抜きです。自重する予定はございません。
ご了承ください。F91を使った理由その2、(その1は戦いにく
いから) なんとおおおお！が使いたかったから。

変貌 VS シュヴァルツェア・レーゲン? (前書き)

第20話です

最近少し忙しくなってきたので更新が遅れています。すみません

変貌 VS シュヴァルツェア・レーゲン？

「なんだよ、あれは・・・」

ラウラのISだった物がラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のようにい脈動を繰り返し、ゆっくりと地面に降りていった。

地面に降り立つと高速で全身を変形・形成させていく。その姿は先月の襲撃ISと似ても似つかない黒い全身装甲フル・スキンのISに変形した。最小限のアーマーが腕と脚についている。

頭部にはフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤く光を漏らしていた。

そして、その両手には一夏が持っている雪片二型にとても近かった。

「雪片・・・！」

一夏が雪片二型を中段に構えるのが見えた。

刹那一夏に向かってそのISは飛び込んでいく。

放たれた刃を一夏はなんとか受け止める。

しかし、そのまま鋭い斬撃が一夏を襲う。

「一夏！！」

援護に入ろうとするが、もう遅い。一夏は後方に回避しようとするが間に合わず軽く左腕を切られ血がにじむ。

「それがどうしたああっ！」

一夏は声を上げながら黒いISに駆けていく。

「うおおおっ!!」

一夏が拳が黒いISに触れる寸前で打鉄を装備した篠ノ之さんが黒いISとの距離を離していた。

「馬鹿者！ 何をしている！ 死ぬ気か!？」

「離せ！ あいつ、ふざけやがって！ ぶっ飛ばしてやる！」

「篠ノ之さん、そのまま一夏を遠くに。俺は時間を稼ぎます」

俺はそう言っって黒いISに向かっていく。

・
・
・

戦闘を開始して3分。

敵はすばやく間合いを詰めて来て俺に反撃の隙を与えない。

「なんだ、この感じ・・・俺は知ってるぞ・・・この動きを・・・」

黒いISの動きをいつも近くで見っていたような気がした。

「ユウ、ユウ、聞こえる？」

「シャルかなんだ？」

オープン・チャンネルで連絡が入る。

「ユウ、後は俺に任せてくれ。頼む・・・」

その表情は先ほどと違い落ち着いた表情だった。

「・・・わかった」

黒いISから、なんとか距離を取り。

一夏の方へ全身装甲モードを解除しながら行く。
パンツ！！手と手を叩く。

「決めるよ！」

「おう！」

短いやり取りをして、一夏は黒いISに向かう。

「じゃあ、いくぜ偽者野郎」

右手に握り締めた雪片二型が一夏の意志に呼応するかのように刀身を展開し零落白夜を起動させる。

その刃は普段のエネルギー刀と違い、細く鋭い日本刀に集約した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒いISが刀を振り下ろす。

「ただの真似事だ」

ギンツ！ 腰から抜き放った横一線が黒いISの刀を弾く。

そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ黒いISを断ち切った。

黒いISが真っ二つになり中からラウラが排出される。

崩れ落ちるラウラを一夏が抱きかかえる。

「やったな、一夏！」

「やったね、一夏！」

「一夏、信じてたぞ」
「みんな・・・」

一夏がラウラを抱かえながら俺たちの居るほうにやってくる。後ろで真つ二つになっているのちに光る球体が見えた。

黒いISのラインアイ・センサーが赤く光る。

「一夏、危ない!!」

黒いISは再びドロドロの状態に戻り、体を構成させていく。ワイヤーブレードが4本一夏に向かって延びる。俺は一夏を突き飛ばし間に割って入る。

「ぐっ!」

両手両足を固定される。

「グウオオオオオオ!!」

黒いISが獣に近い叫び声を上げる。

刹那、ワイヤーブレードを俺の腹部に向け延ばす。

「ユウ!!」

三人が叫ぶ。

「F91・・・すまん」

そう呟きながら、俺はISを強制解除した。

ISの各所から小さな光が走り装甲が割れる。

装甲が外れたことにより俺は前に向かって転がった。
先ほどまで俺の体が存在した場所にワイヤーブレードが通る。

「あつぶねえ」

俺は急いでスカルハートを展開し、距離を取る。

「後は俺がやる。お前達は下がれ」

「わかった」

「ユウ、僕も手伝うよ」

「ああ、頼む・・・でも危なくなったら逃げるよ」

「うん、わかったよ」

一夏達が避難したことを確認して再び黒いISを見る。

その姿は先ほどと違った。外見はラウラが使っていたISに近い、
だが武装が違うのだ。

両肩に黒い非固定浮遊部位アンロックユニットそして6機の浮遊する自立起動兵器だ。

「鈴の衝撃砲・・・それに・・・」

「セシリアのブルー・ティアーズだね・・・」

「お前達、聞こえているか。お前も避難しろ。聞こえているかすず
m
」

俺は織斑先生から来た通信をきれた。

黒いISの赤い目が高速で点滅している。

「なんだ・・・？」

「鈴村聞こえるか、アリーナの遮断シールドがレベル5になった。
ついでにそのISから強力な妨害電波が出ている」

アリーナ内に放送が響きわたる。

「こちらで、なんとか解除を試みる。それまでなんとか」
「いえ、コイツは俺たちでやります」

スカルハートの小型内臓スピーカを最大で言う。

「グウオオオオオオオ!!」

再び黒いISが叫び声を上げると同時に衝撃砲でアリーナのスピーカを破壊した。

衝撃砲の狙いがこちらを向き、発射体勢に入る。俺はザンバスターを構えた。

発射体勢に入っていた衝撃砲が放たれる。

それを回避しながらザンバスターを構え狙いをつける。

しかし、上空から黒いブルー・ティアーズ4機からビームが放たれる。

「チッ！」

あたる寸前のところで回避するが、ABCマントに数発命中する。が、拡散してダメージはない。

セシリアのブルー・ティアーズと違い本体とビット同時に攻撃が行われる。

まるでビット一つ一つが意思を持っているかのように。

「シャル、先にビットを」

「分かった」

先に厄介な4機のビットに的を絞る。

「速いつ!? だめだ、目で追えても体の反射が追いつかない」

シャルは、六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』と六十一口径アサルトカノン『ガラム』でビットに対して攻撃をするがビットはそれを簡単に回避し的確に反撃してくる。

「!?!」

追える!ビットの動く先が手に取るように見えるっ! ザンバスタ
ーでビットを撃つ。
ビットに掠る。

「ユウ、あれに当てられるの?」

「ああ、だけど今ので精一杯だ・・・だけど当てられるのならば
すことができるはずだ!」

「えっ?」

フル・スキン
全身装甲モードを起動させ、近接戦に持ち込みもつとする。
衝撃砲とビットによる妨害攻撃が接近を阻む。

「ユウ、援護するよ」

シャルの援護によって接近を容易になった。
すると黒いISの腰部の突起がはずれ動いた。
刹那、2機のビットからミサイルが放たれる。

「その手は効かん」

ビーマザンバーでミサイルを2機とも真っ二つにする。背後で爆発。

その爆発の爆風を利用してさらに加速する。

「取ったぞ!!」

ゼロ距離

ビーマザンバーから両腕のブラインド・マーカを起動させ殴り付ける、2機の衝撃砲に十字の傷跡を残す。

「グウオオオオオ!!」

俺に4機のビットの狙いが定まる。

「やらせないよ!!」

シャルが4機のビットに対して『レイン・オブサタデイ』と『ガルドム』を連射して破壊する。俺は上空に距離を取る。

マントを投げ捨て、重力に任せながら落下する。

腰部後ろ左右に内臓されているスクリューウィップを両手に持つ。

「シャアアッ!!」

黒いISが叫び声を上げながらワイヤーブレードを延ばしてくる。

ワイヤーブレードによって、間にあったマントが三枚に引き裂かれ胸の装甲に命中する。

スクリューウィップは黒いISの装甲に食い込む。

「ゲ・・・ガ・・・」

すかさずスクリューウィップの先端のドリルを回転させて内部を破壊する。

「グア・・・ギガア・・・ギギ・・・」

むき出しになった胸中央に光る球体が見える。

「アレが本体か!？」

最後の足掻きだろうワイヤーブレードを一直線にこちらに向ける。一直線で向かってくるワイヤーブレードを回避し光る球体に手を伸ばし引き抜く。

本体を引き抜かれた黒いISはドロドロになって溶けていった。

「終わった・・・か」

光っていた球体は徐々に光は小さくなっていった。

同時に感じていた悪意が消えるのが分かった。

翌日。トーナメントは中止、一回戦は個人データ指標と関係するた
め行つらしい。

「昨日はあの後大変だったね」

「ああ・・・」

あの黒いISとの戦闘が終わったあと教師陣からの事情聴取それに付け加え、トーナメントを見に来ていたオーティス主任にF91を壊したことで長時間怒られた。

「何かあったのですか？」

「事情聴取の後に」

セシリアの質問に答えようとするが、ガラガラガラ教室のドアが開きラウラが入ってくる。

いきなり、一夏の胸倉を掴み、引き寄せ唇を奪った。

「……………」

クラス中の時間が止まる。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

クラス中の全員が二人を見ている。ガラガラガラ、再び教室のドアが開き鈴が入ってくる。

「一夏、おは……どうしたのみんな固まって」

鈴がクラスの異変に気が付き質問してくる。

「一夏がラウラとキスした」

「はあ？」

「だから、一夏がラウラとキスしたんだ」

「あ、あっあ……アンタねえええっ……！！」

ISを展開し一夏に襲い掛かる。

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかというと被害者サイトだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い……！！」

その後、篠ノ之さんの乱入もあり一夏はSHRまで走り回っていた。

「平和だな」

「そうですね」

「そうだね」

その惨事を横に俺とシャルとセシリアは平然としていた。

変貌 VS シュヴァルツェア・レーゲン？（後書き）

今回、オリジナル展開を入れてみました。光っていたのはISのコアです。

第20話終了時点でのヒロイン達の恋愛対象＋男二人の性格

シャル、セシリア＝ユウ

自分と関係ない恋愛関係の事は理解できるが自分のことになるとまったく分からない。

篤、鈴、ラウラ＝一夏

原作と同じく恋愛に対して鈍感

プロローグを少し増やしました

よめる口羅口(前書)

第21話です

とある日曜日

臨海学校前、日曜日の朝。

ピピピピピピピピ携帯が鳴り響く。

「電話？誰だ、こんな時間に」

電話の液晶にはオーティス主任と表示されていた。

「はい」

「なんだ、起きていたか」

「起きていたかじゃないですよ。なんですか？こんな朝早くから？」

時計を見るとまだ5時を回ったところだった。

「今からサナリイに来い」

「今からですか！？」

「そつだ、6時半にミューラくんが迎えに行く。じゃあ待ってるぞ」

「て、ちょっと」

電話を一方的に切られる。

・
・
・

サナリイ、いつもと変わらないオーティス主任の部屋。

「遅いぞ、ユウ」

「朝の5時に電話で起こしといて言うセリフですか？」

「ミューラくん例の話を」

「スルーかよ」

「各種装備試験運用とデータ取りに使う装備をシャルちゃんに試して欲しいの」

「シャルにですか？」

「ええ、元々F90用に作られたミッションパックをいろいろなISに使用してそのデータが欲しいのよ」

ミッションパックとは、装着することで白兵戦、後方援護など行うための追加兵装の事である。

「なるほど、わかりました。伝えておきます」

「言っておくがお前にも新装備のデータ取りをやってもらうからな」

「分かっていますよ。では、俺は帰ります」

「なんだ、もう帰るのか？」

「はい、ちよっと約束が」

朝、ここに来る前に寮から出ると部屋の前にシャルとセシリアがいた。

部屋の前で二人はなにやら言い争いをしていた様だが俺がドアを開けると同時に『シヨッピングに付き合ってくれ』的な事を言われた。二人は言い終わると少しにらみ合ったが『3人で』ということ落ちて着いたようだった。

「あら？ もしかして、ユウくんデート？」

「そんなんじゃないですよ。シヨッピングですよ、シヨッピング」

「そついうのをデートって言うんじゃないか？」

オーティス主任の一言を無視して部屋から出た。

「あらあら、怒らせちゃったかしら？」

「ふん……」

・
・
・

午後。

シヨッピングモール2階の女性用水着売り場。

「ユウさん、どうですか？ 似合ってますか？」

「ユウ、どうかな？ 似合ってるかな？」

セシリアは鮮やかなブルーのビキニ。

腰にパレオが巻かれていて優雅で格好いい。

シャルは鮮やかなイエローでセパレートとワンピースの中間のような水着。

胸の谷間を強調するようにできていた。

「う、うん、ふっ二人とも似合ってるぞ。うん……」

正直女性の水着を選んだ事など1度もないので、二人が喜びそうな言葉が見つからない。

「では、わたくしコレにしますわ」

「僕もコレにするよ」

そう言って、二人は試着部屋に戻っていった。

「ふう……」

「あら、鈴村くんじゃない」

振り向くと山田先生と織斑先生と一夏と篠ノ之さんと鈴がいた。

「どうしたんですか？ こんな所に」

「ユウ、こそ何してるんだ？」

「シャルとセシリアの水着を選びに来たんだ」

「そうか、で二人は何所だ？」

コイツは当たり前前のことを聞くな……。

「ユウ誰かいるの？つて山田先生に織斑先生！？ それに一夏達まで」

「どうしたんですの？つて山田先生に織斑先生！？ それに一夏さん達まで」

着替え終わった二人が試着室から出てきて同じ様な事を言う。

「あ、あー。私ちよつと買い忘れたものがあつたので行って来ます。えーと、場所が分からないので篠ノ之さんと凰さんついてきてください。それに鈴村君達も」

織斑先生に対して山田先生なりに気を使つたんだろう。

「それでは、わたくし達も行きましょうか」

「そうだね、行こうユウ」

「おい、引つ張るなよ」

二人に引きずられる形で後にする。

嵐との再会1（前書き）

第22話です

嵐との再会 1

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いします」「」「」

織斑先生の言葉の後に全員で挨拶する。花月荘。この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
歳は三十代くらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気漂わしている。

「ねえ、ねえ、ねえ、ユ、ユウ。あの人って」
「？」

シャルが俺の肩を数回叩き前を指差す。
指差した方向にこちらに向かって手を振っている従業員がいた。

「あれって、お母さんだよね？」
「・・・はあ？」

見間違えるはずがない長い黒髪の女性がいた。

「か、母さん・・・!?!?」
「「「母さん!?!?!」「」「」

クラスメイトがざわめきが起こる。

「なんで、ここにいるんだ？ エジプトに行ったんじゃないか？」

「風の噂でES学園の臨海学校があるって聞いて来たのよ」

「風の噂って……」

誰だ、この人に情報回したのは。

「鈴村さん、皆さんを部屋に案内してください」

「はぁ〜い。またね、ユウちゃん」

手を振りながら嵐は去って行った。

「……悪夢だ」

悪夢の三日間、初日が始まった。

「俺達の部屋ってどこだ？ 一覽に書いてなかったな」

「そういえば、そうだな」

女子と寝泊りをさせるわけにも行かないということ、俺と一夏の部屋は別の場所が用意されているらしい。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」

一夏は織斑先生に呼ばれた。

「織斑先生、俺は？」

「鈴村君、コツチですよ」

「お前は山田先生と同室だ」

「分かりました。失礼します」

山田先生に着いて行き『教員室』と書かれた部屋に入った。

「本当は織斑君と同じ部屋にする予定だったんですけど、それだと絶対に就寝時間を無視する女子が押しかけるだろう」と、織斑先生の一言で教師と同室にすることになったんです。さすがに教員が入れば近づかないでしょうから」

「そうですね・・・」

納得する理由だ。

でも、山田先生だと効果が薄い気が・・・。

「そつだ、鈴村君。私の事を押し倒したりしないでくださいね」

「しないですよ。そんな事」

疑いの眼差しを向けてくる。俺はすぐに否定した。

「それでは、私は織斑先生に用事があるのでこれで。今日は自由時間ですからこの後は好きにしてくださいね」

「あ、はい」

山田先生は部屋から出て行った。

「ユウちゃん」

「!?!」

ビクッ！ 山田先生が出て行ってすぐに聞き覚えのある声が聞こえ

た。

「あなた、仕事はどうしたんだ？」

「ん？ もちろん抜け出して来たのよ」

「はぁ・・・」

「もう、ため息つくと幸せが逃げるわよ」

悩みの種がそれを言うのか。

「おやじは？」

「ダーリンは今日の夜に出す食材を取りに行ってるわ」

「今、ここにいないだけありがたいな・・・」

「あら、ダーリンが聞いたら泣いちゃうわよ」

「泣いて帰ってくれたほうが、俺はありがたいんだけどな」

二人のテンションはいつも高い。

一人の時は何とかなるが二人そろつと手がつけられない。

「ユウさん、いらっしやいますか？ 一緒にビーチにいきませんか」

コンコンとドアが叩かれセシリアのある声が聞こえた。

「セシリ、ぐえ」

いきなりのヘッドロック+口を塞がれた。

「ふぁにふいやふぁなた（なにしやがんだ）」

「うふふ・・・もう少しお話ししましょうよ」

「ユウさん？ いらっしやいませんか？」

このままでは、セシリアが行ってしまふ。
たぶんコレを逃したら1時間はお話が続くだらう。

「ふあなせって(離せって)」

「うふふ・・・ダメ」

「いらっしやらないようですね・・・残念ですわ」

希望が希望が去って行く。

「セシリアじゃないか？ どうかしたのか？」

「一夏さん、ですか。それが、ユウさんと一緒にビーチに行こうと思っただですが、どうやら部屋にいらっしやらない様でして」

「ん？ カギ空いてるぞ」

「本当ですわね」

ガチャという音と共に部屋のドアが開かれる。
それと同時にヘッドロックから開放される。

「あら、ユウのお友達？ユウの母の鈴木結衣です。」

「あ、始めまして、織斑一夏です」

「始めまして、セシリア・オルコットです」

「はーはーはー」

挨拶をしている3人を横に肩で息をしている。

「ユウさん、どうしたんですか？」

「母さんに・・・いや。なんでもない」

「？」

俺の言葉に二人は首を傾げた。
前に同じようなことをされた時、その理由を言ったら数時間気絶させられた記憶がある。

「それより、二人ともユウに用事があったんじゃないのかしら？」

「そうでしたわ。ユウさん折角ですから泳ぎに行きませんか？」

「いや、でも母さんいるからさ」

「私のことは気にしないの。ほらユウ、行ってきなさい」

「今まで、拘束してた人の言うことか？」

「ふふふ・・・何のことかしら？」

悪の女性幹部の様に微笑み、とぼけていた。

花月荘から1分、青い海、白い砂浜が広がっていた。

ついでにいえばサナリイから40分ぐらいの距離なので夏は暇があれば良く訪れていた。

「・・・・・・・・」

砂浜に来た俺は体育座りで頭を抱えていた。

「ユウ、アレってお父さんだよな」

「俺は知らない。何も見てない。おやじがビーチバレーやってる姿なんか見てない・・・」

「しっかり、見てますわね」

水着に着替えを終え砂浜に出て来て最初に目についたのは、3対1のビーチバレーである。

しかも部外者が入れないはずのこの砂浜に平然と水着を身に着けた

男性が平然とビーチバレーをしている。

「それにしても凄いな。1人で3人を圧倒してるぞ」

「また、点を取りましたわ」

信じられないことに、アタック、ブロック全てを一人でこなしていた。

「お、ユウじゃないか。どうしたんだ、こんな所で？」

「そのセリフ、そっくりそのまま返すよ」

試合が終わったらしく、俺を見つけたおやじはモリとクーラーボックスを持って近寄ってきた。

「なに、海から今日出す予定の食材を取って戻る途中に彼女達がビーチバレーしているのが目に入ってな」

モリとクーラーボックスを見せながら話を続けた。

「つい懐かしくて仲間に入れてもらったんだ」

「てか、アンタ仕事中だろ。戻れよ!!」

「安心しろ、俺が担当しているのは夕食の食材集めだ。2時までに戻れば問題ない。」

自信満々に言い放った。

「勝手にしてくれ・・・」

「なら、勝手にさせて貰おう!」

そう言って再びビーチバレーに戻っていった。

「前から思ってたけど、ユウのお父さんもお母さんも凄いな」

「ああ、まるで東さんを見てみたいだ」

「東さん？その人ってもしかして篠ノ之博士の事か？」

篠ノ之博士 本名は篠ノ之束。篠ノ之箒の姉で1人でISの基礎理論を考案、実証し、全てのISのコアを造った自他共に認める天才科学者。

ISを開発したことから政府の監視下に置かれていたが、突如行方をくらませる。

失踪後も唯一コアの製造方法を知っているため、各国から追われている。

「ああ、そつくりだ」

「そうか、篠ノ之さんも大変だな。そういえば篠ノ之さんは、どうしたんだ？」

「そつういえば、見ないな」

きつと一夏に水着を見せるのが恥ずかしいのだろう。

「一夏、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の『@クルーズ』でパフエおごんなさいよ よーい、どん！」

「これ、卑怯だぞ！ ええい、待て！」

「あははっ。ぼーっとしてるのが悪いのよ」

『どん』といい終わる前に鈴は砂浜を走りだし、それを追うように一夏も走り出した。

「あの、ユウさん。もし宜しければサンオイルを塗って頂けませんか？」

「ん？ いいぞ」

「それでは、お願いしますわ」

しゅるりとパレオを脱ぎ首の後ろで結んでいたブラを解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。

「背中だけでいいんだよな？」

「できたら手の届かないところ全部お願いします。脚とその、お尻も」

「えっ！？ それは、勘弁してくれ」

「そうですね、残念ですわ」

サンオイルを塗り終わりシャルに声をかけようと思ったら、すぐ横にあるバスタオルの山が少し動いた。

「なあ、シャル」

「どうしたの？」

「そのバスタオルおぼけはなんだ？」

バスタオル数枚で全身を頭の上から膝下まで覆い隠している。

「ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・」

「ラウラか・・・？」

いつもの自身に満ちた声ではなく、ずいぶん弱々しい声に聞こえた。

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから出てきなよ」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな・・・」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃない。ー

応僕も手伝ったんだし、見る権利はあると思うけどな」

シャルとラウラは現在、同室になったらしい。

先月までライバル同士であったが今はルームメイトとして仲がいいようだ。

「そつだ、一夏に見てもらつ前にユウに見てもらつて感想言つてもらいなよ」

「お、俺か？」

「そ、そつだな・・・」

バスタオルおぼけが立ち上がり、バスタオルを脱ぎ始める。

「おかしいとこなんてないよね、ユウ？」

「ああ、大人つぼくて素敵だと思つぞ。これなら一夏を悩殺できるんじゃないか」

「む、むう・・・」

再びバスタオルおぼけに戻り始める。

「なんで戻るんだ？」

「お、お前には関係ない・・・」

「はあ・・・」

俺とシャルは顔を見合わせてため息をついた。

「そつだ、言い忘れてたけど」

「ん？」

「シャルの水着も似合つてるぞ」

「う、うん。ありがとう」

シャルは照れくさそうに髪をいじっている。

「ユウさん、わたくしの水着は似合ってますか？」

「ああ、セシリアの水着もとても似合ってるぞ」

「うふふ、そうですね」

セシリアは嬉しそうに微笑んでいた。

すぐ横でシャルがムスツとしていた。

その後、泳ぎに行っていた一夏と鈴が帰ってきて、ラウラの水着のお披露目、織斑先生の登場などがあり、楽しい時間は流れていった。

「そろそろ、戻るか」

「そうだな」

俺と一夏は、シャルたちと別れて更衣室に向かった。

嵐との再会2（前書き）

第23話です

嵐との再会2

「あゝ、さっぱりした」

海を一望できる露天風呂を広々と使用することができて上機嫌で部屋に戻る。

（山田先生も温泉かな？）

部屋にいないところを見るとそうだろう。
するとコツンと窓に石が当たった様な音がした。

（ん？気のせいかな？）

すると、再びコツンと窓に石が当たった音がした。
窓を開け周囲を見渡すと石を何個か手に持っている親父がいた。

「何だよ、こんな時間に？」

「運動できる格好で降りて来い」

「俺はいま風呂に入ってきたんだ、汚れたくねえーよ」

「つべこべ言わずに降りて来い」

「わかった、わかった。すぐ行くよ」

動きやすさを考慮してISスーツに着替える。

（先生に見つかったら厄介だからな）

2階の窓から飛び降りる。

「よつと」
「ハッ!!」

着地すると同時に目の前に拳が迫る。

「!?!」

迫り来る拳を寸前でかわし距離を取る。

「いきなり何しやがる!!」

「避けるのは前と変わらないようだな・・・だが技とスピードはど
うだ!!」

「ちいつ!!」

・
・
・

迫る攻撃を避ける、受け流す、相手を掴み投げる。
様々な攻撃が続いた。

「いて!!」

俺は投げ飛ばされて木に頭をぶつけた。

拳が顔面に迫るが、顔面に拳が命中する前に止まる。

「どうした勇。技とスピードは前回より落ちているんじゃないか？」

「うるせえな、俺は生身で戦う気はねえよ」

「だろうな」

「「イテッ」」

俺と親父の頭に同時に空き缶があたった。

「さつきから騒々しいぞ！」

上を見上げると織斑先生が学校の時と同じように部屋の窓からこちらをのぞいていた。

「すみません織斑先生」

「やあ、ちーちゃん久しぶり」

「大樹・・・そう呼ぶなと何度言わせればわかる」

「100回かな」

「言つてやるうか？」

「遠慮しまあゝす」

俺は二人が話しているうちに立ち去ろうとする。

「鈴村！」

「は、はい」

「部屋でシャワーを浴びたら部屋に來い」

「りょ、了解です。じゃあな親父」

「おっ」

親父と別れて部屋に向かった。

(山田先生はまだ温泉かな？それにしても遅いな)

部屋に備え付けてあるシャワー室に入り泥と汗を落とす。

「はぁ・・・」

これから、織斑先生の部屋に行くのかと考えるとため息が出てしま

う。

シャワー室から出て浴衣を着てから隣の織斑先生の部屋に向かった。

「鈴村です、入ってもいいですか？」

「やっと来たか、入れ」

「失礼します」

ドアを開けるとそこには織斑先生と山田先生と見覚えのある女性がテーブルを囲んでいた。

「母さん、何やってるんだ」

「まあまあ、気にしない、気にしない。ねえ、ヤマヤちゃん」

「結衣さん、その呼び方やめてください」

「じゃあ、ヤマヤマちゃんね」

「そ、それもちょっと・・・」

こんなやり取りを学校で見たような・・・。

「あれ、一夏は?」

「あいつなら、さっき買出しに行かせた」

「そうですか」

「ところで鈴村、反省文と料理を作るのどっちがいい？」

「えっ?」

俺が呼ばれたのって酒のつまみが欲しかっただけじゃ・・・。

「それで、どうする?」

「どうしましょか?」

「どうするのかな?」

三人とも同時にビールに口をつけて楽しそうな表情を浮かべていた。

天才現る(前書き)

第24話です

天才現る

合宿二日目。

今日は丸一日ISの各種装備試験運用データ取りに追われる。

特に専用機持ちは装備が大量で大変である。

俺は今日のサナリイから届いた各種装備の受け取りをするため、朝早くから旅館の前で待っていた。

本当ならば昨日のうちに届いていたはずなのだが、サナリイで少しトラブルがあつたらしく届くのが今日の早朝になったのだ。

「ふあゝああ・・・ねむ・・・」

旅館の前で愚痴をこぼしていると一台のトラックが目の前で止まり、中から作業服を着た男性とサナリイの制服を着た小柄な女性が降りてきた。

作業服を着た男性はトラックの荷台を開け作業を始める。

「始めまして。わたしはサナリイから着ました、リディア・マディンです」

「朝早くからご苦労様です、マディンさん」

「リディアでいいですよ。わたしの方が年上ですけどサナリイではあなたの方が先輩ですから」

「そうですね？光栄ですリディアさん」

「それでは、装備の説明をさせていただきます」

「はい、お願いします」

約20分弱の装備の説明が続いた。

「本当だったらミユウラさんが来るはずだったんですけど、昨日の

トラブルで忙しいので代わりに私が来ました」

「そういえば、聞いたかったんですけど、昨日あったトラブルって何ですか？」

すると彼女は、あたりをキョロキョロと見回し辺りに誰もいないことを確認してから小声で話し始めた。

「実は何者かがサナリイにハッキングしたらしく、そのせいでサナリイのセキュリティシステムが停止してしまっただけで、復旧している最中なんです」

「それって、結構な大事たいじじゃないですか。大丈夫なんですか!？」

「今、私を含めたテストパイロットメンバーでローテーションを組んで警備に当たっています」

「私を含めたって、リディアさんってテストパイロットなんですか？」

「はい。しかも私、今あなたが使用して」

「マディンさん、搬入完了しました」

トラックから荷物を降ろし終えた作業服を着た男性が声をかけてきた。

「お疲れ様です。それでは、私はこれで」

「ご苦労様です」

・
・
・

IS試験用ビーチ。

四方を切り立った崖で囲まれていて、秘密のビーチを連想させた。

「それでは、各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うよう

に。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーいと一同が返事をする。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた篠ノ之さんは、織斑先生に呼ばれそちらに向かう。

「お前には今日から専用」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

ずどどどど……!と砂煙を上げながら人影が走ってくる。

滅茶苦茶速い。

たぶん、ISっぽい何かを使っているのだろう。

「……束」

織斑先生の呟いた名前ですぐで乱入者の正体がわかった。

篠ノ之博士は乱入すると、そこにいた人たちに『イメージと違う』と思わせただろう。

セシリアは自分のISを篠ノ之博士に見て貰おうとしたが明確な拒絶をされてしまう。

そこにいた全員がいきなりの態度の違いに驚いていた。

かなり印象に残る登場の仕方をした篠ノ之博士は篠ノ之さんの専用機『紅椿』を用意していた。

「やれる!この紅椿なら!」

「すげえ……」

全員がその圧倒的なスペックに驚愕し、そして魅了され、言葉を失っていた。

「君がゆーちゃんとかーちゃんの子供かあ。それにしても、どちらにも似てないねえ……」

そう言いながら篠ノ之博士は俺の周りを回りながら体を観察していた。

「えっと、母さんと父さんと知り合いなんですか？」

「ん。興味を引く対象ってとこかな……。それより、君のISを見せてよ。東さんは興味津々だよ」

「は、はい」

少し前にセシリアに対して取った態度と大違いだ。

俺は『スカルハート』を展開する。

展開された『スカルハート』の装甲にコードを刺すとディスプレイが空中に浮かびだす。

「ん。中々の性能だね。エネルギー兵器を一定回数無効化するマントかあ。ふむふむ、マントを纏っている時はISのワールドに回すはずのエネルギーを最小まで減らして節約しているのかな。なるほどなあ……。それに全身装甲状態では第四世代に近い性能を出せてるね。現存する第三世代のISの中でもトップクラスの性能なんじゃないかな。」

「篠ノ之博士にそう言っただけだと嬉しいですよ」

「ん。篠ノ之博士なんて、堅苦しい肩書きはいいよ。いつくんみたいに東さんでいいよ。その代わりゆーくんって呼ぶけどいいよね」

「こ、光荣です、た、東さん」

「声が小さいよ。ほら、もう一回言ってみようか」

べしん！と手加減なしの織斑先生の打撃が束さんの頭にヒットする。

「いい加減にしろ、束。鈴村が困っているだろう」

「いたた。ん〜、ちーちゃんの愛情表現は食らうたびに威力を増していくねえ」

「まだ、食らい足りないか？」

さらに一発織斑先生が叩こうとした時に、ピピピピッとISにサナリイから通信が入る。

小型ディスプレイが展開され映像が出る筈なのだが映像は出ずに砂嵐が映されていた。

「ユ・くん、た・へ・なの・・・サナリイ・・・謎のIS・・・襲撃
さ」

いくつかの単語が聞き取れた。

サナリイ？

謎のIS？

襲撃？

何者かがサナリイを襲撃しているらしい。

「織斑せー」

「たっ、た、大変です！お、おお織斑先生っ！」

いつも慌てている山田先生がいつもに増して慌てていた。

「どっした？」

「こっ、こっ、これをつー！」

渡された小型端末の、画面を見て織斑先生の表情が曇る。

「特命レベルA、現時刻より対策を始められたし・・・」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動していた」

「しっ。秘密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すいませんっ・・・」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

織斑先生と山田先生は小さな声でやりとりをしている。

しかも、数人の生徒の視線に気がついてか、会話から手話でのやりとりを始めた。

しかも、その手話は普通の手話と違い軍なので使われる暗号手話だった。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。 全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生はパンパンと手を叩き生徒全員を振る向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動に移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え・・・？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って・・・」

「状況が全然わかんないけど・・・」

不測の事態に、女子一同が騒がしくなる。

しかしそれを、織斑先生の声が一括した。

「とつとと戻れ！以後、許可無く室外に出たもの我々で身柄を拘束する。いいな！！」

「「「はっ、はい！！」「」」

全員が慌てて動き始める。

接続していたテスト装備を解除、ISを起動終了させてカートに乗せる。

その姿は今まで見たことのない、怒号におびえているかのようにもあつた。

「織斑先生、実は」

「鈴村、話は聞いている。ISの起動許可を出す。オルコットとシヤルロットを連れて行け」

「「えっ!?!」」

「了解、行くぞ二人とも」

二人は訳が分からないまま走り出していた。

「ちょっと、どういう事ですか?」

「そうだよユウ、説明して」

「サナリイだ。サナリイが何者かに襲撃されているらしい」

「サナリイってユウさんの所属している企業でしたわね」

「ミューラさん、大丈夫かな?」

「分からない・・・急ぐぞ!!」

俺たちはISを起動させてサナリイに急いだ。

目覚める力？ V.S. マスクサ (前書き)

第25話です

目覚める力？ VS アマクサ

「見えた！」

サナリイをハイパーセンサーの最大望遠で視認する。

サナリイのある場所は、プールが突然割れて中からロボットが出てくるアニメの研究所がありそうな森の奥にある。

「ユウさん、前方に正体不明の敵機が多数……この反応はIS！？」

「でも、反応は30機以上反応があるよ」

サナリイのある方向に見たことの無い2機のISの姿があった。

大半は頭部に半球状のゴーグルのような形をしていて、頭部脇には太いアンテナが一本立っていてシユノーケリングのような外観をした機体。

もう一機は後頭部が非常に長く、その部分は透明なカバーで覆われており、背部に大型のノズルを有している機体。

「ありえませんか。30機ものISがこの場に存在するなんて」

ISのコアは467機しか存在しない。

つまりISは467機しか存在しないということだ。

しかもISのコアは各国、各企業で管理されている。テロリストに強奪された機体もあると聞いたことがあるが30機は多すぎる。

するとこの反応は、それ以外のコアで動いているという事になる……篠ノ之博士がさらに製作したか、それかどこかの企業が独自に開発したか……考えても始まらない。

「アレがISであろうとなかろうと邪魔するなら倒すだけだ!」
「う、うん」

「わ、わかりましたわ」

俺は新兵器である9連ビームライフル、『ビークックスマツシャー』を展開する。

セシリアはスターライトmk?を展開し、シャルは今日テスト予定だったロングレンジライフルを展開し構えた。

「先制攻撃で数を減らす!!」

言い放つと同時に射撃に移る。

ビークックスマツシャーから前方9方向に射撃が行われる。

頭の長い機体は避けるが、もう一機の機体は回避運動を取る事無く打ち抜かれ爆散した。

「動きが鈍い、無人機か」

「頭が長いほうの機体は攻撃を避けましたわ。有人機かも知れませんわ」

頭の長い機体がビームサーベルを展開しながら接近してくる。

腰にマウントされていた、ビームザンバーを抜刀する。

相手が振るうビームサーベルを一度ビームザンバーで受け、サーベルごと腕を切断する。

最初は腕を切ることを躊躇ちゆうちゆうしたが相手の機体から聞こえてくる機械的な音で無人機と判断し腕を切断した。

「コイツも無人機か」

「なら、遠慮はいりませんね!」

と言ってセシリアはブルーティーズのビットを使って、腕を切断した機体に向けて攻撃をした。

「だが数が多い。このままでは、サナリイに向かうことができない」

敵はこちらを囲むように旋回し一定の距離を取り始めていた。

「ユウさん、ここはわたくし達が引き受けますわ」

「ユウは、先に行って」

「わかった」

この場を二人に任せて俺はサナリイに急いだ

「セシリア、僕が前に出る。セシリアは援護をお願い」

「わかりましたわ」

シャルは、ロングレンジライフルを収納して新たにショットガンとアサルトカノンを展開してセシリアの前に出る。

「いくよ、セシリア！」

「ええ、いきますわよ、シャルロットさん！」

二人は息を合わせ戦闘を再開した。

・
・
・

二人と別れてから上空を飛ぶのをやめ、森の中を進んでいた。

「邪魔をするなあ……！」

サナリイに向かうのを妨害するように敵機がビームサーベルを展開しながら迫るがビームザンバーで敵のビームサーベルごと敵を真っ二つにした。

「敵の反応は、コレだけか・・・？」

レーダーとセンサーを使い敵を索敵するが反応はない。移動するなら今だろう。

森を抜けサナリイの正面玄関から100m程の開けた所に出た。そこにはグレー一色のISが待ち構えていた。背部に大型のスラスタ、頭部にはV字のアンテナ、センサーと思われる部分がモノアイ（一つ目）を思わせ、その両手にはライフルと大型のシールドを装備していた。

「こいつは・・・他の無人機と違う・・・？」

「フフフ・・・待っていたよ鈴木勇」

敵のISの内臓スピーカから聞こえた声は男の声だった。

「何者だ？何故男がISを起動できる？」

「それは、君にも同じことが言えるんじゃないかな？フフフ・・・まあ、私の場合は、起動したのではなく動かしているが正しいがな」「なに！？どういうことだ」

「無駄話はこちらまでだ。彼女が仕事を終わらせるまで、この『アマクサ』に付き合ってもらおう」

センサーを覆うようにバイザーが下がりセンサーが一瞬、鋭く光る。

「さあ、見せてもらおうか男が操作するISの性能とやらを！」

敵IS『アラクサ』は、手に持っているビームライフルの銃口をこちらに向けた。

「くっ!」

アラクサの射撃に対してビームザンバーとバスターガンを連結させてザンバスターで応戦する。

「どうした、君の力は、その程度ではなかつ」

アラクサの撃つビームはマントに当たり四散する、俺の撃つビームは相手の装備するシールドによって防がれてしまう。

「そこまで言うなら見せてやる。俺の本気を!!」

フル・スキン
全身装甲モードを起動させて、敵ISに急速接近する。

十分距離を詰めたところでザンバスターの連結を解除してビームザンバーを抜刀する。

「ハアツ!!」

「面白い!!」

そう言つてアラクサは、ビームライフルを投げ捨て、ビームサーベルを抜刀した。ビームザンバーとビームサーベルがぶつかり合い閃光が走る。

「流石、あの女の所で訓練を受けているだけの事はある」

(あの女? 織斑先生の事か?)

「だが、まだ未熟だ」

「俺を・・・なめるなああ!!」

シュゴオオオオ

頭部のマスクが展開して放熱される。
敵のビームサーベルごと腕を切り裂く。

「もらったあ!!」

トドメを刺すべく、ビームザンバーを振りかぶる。

「!?!」

その時、脳裏に一瞬間光が走る、同時にセンサーに反応があった。
次の瞬間、背中に大きな衝撃が走り、身に纏っていたABCマント
がボロボロになった。

「・・・流石、世界最強のビームライフル凄い威力」

女の声!?!後ろを向くとヴェスパーライフルを構えた黒い全身装甲
のISがそこにいた。

その外見はスカルハートを鏡に映したようにそっくりだった。

「F97二号機・・・X2か」

そこに居たのはスカルハートの二号機、X2であった。

目覚める力？ VSアマクサ（後書き）

登場IS

バタラ

頭部に半球状のゴーグルのような形をしていて、頭部脇には太いアンテナが一本立っていてシュノーケリングのような外観をした機体。原作のヤラレメカ。本作でもヤラレメカ。

エレバト

後頭部が非常に長く、その部分は透明なカバーで覆われており、背部に大型のノズルを有している機体。原作の指揮官機。

アマクサ（プロトタイプ）

グレー一色のISが待ち構えていた。背部に大型のスラスタ、頭部にはV字のアンテナ、センサーと思われる部分がモノアイ（二つ目）を思わせ、その両手にはライフルと大型のシールドを装備して機体。外伝に登場。

白と黒の戦い スカルハートVSスカルハート？（前書き）

第26話です

白と黒の戦い スカルハートVSスカルハート？

「F97二号機・・・X2か」

そこに居たのはスカルハートの二号機、X2であった。

「メテイス機体の調子はどうだ？」

「大丈夫最適化完了まで時間がかかるけど問題ない。それよりイオ、
フィッティング苦戦してた？」

「なに、少し油断しただけさ。さて、目標を確保したことだし離脱するぞ！メテイス」

「了解」

先ほどまで対峙していたISが方向展開してこの場から離脱しようとする。

「させるか！！」

「邪魔はさせない・・・！」

「チィ！」

離脱しようとするアマクサを追撃するのを妨害するかのようにX2がヴェスパーライフルを連射しながら迫る。

「イオ先に行つて。ここは私が」

「メテイス、気をつけろよ」

「わかった。邪魔者は・・・」

短いやり取りを終えて、敵意がこちらに向くのが分かった。

「始末する・・・!!」

言い放つと同時にヴェスパーライフルを投げ捨て、ビームザンバーを抜刀する。

ビームザンバーがぶつかり合った。

・
・
・

その頃、シャルとセシリアは敵ISと戦闘を繰り広げていた。

「このままでは、ジリ貧ですわ」

「このままじゃ、落とされるのも時間の問題だね」

シャルとセシリアは多数の敵機に囲まれていた。

敵機は二人の周囲を旋回しながら、着々と二人のシールドエネルギーを削っていた。

「危ないです。下がってください」

声がる方向を見ると、先日の学年別トーナメントの時、ユウが使用していたISの色違いのF91がこちらに向かって来ていた。

「私は、サナリイ所属のリディア・マディンです。IS学園の方です
ね、援護します」

「あ、ありがとうございます」

「ア、アレ？敵がサナリイの方向に逃げていきますわ」

今まで二人を囲んでいた敵ISは囲みをといてサナリイの方向に離脱して行った。

「サナリイにはユウが!!」

「ユウって鈴木くんの事ですね、なら急ぎましょう」

三人はサナリイに向かった敵ISを追ってサナリイに向かった。

・
・
・

サナリイでは、白と黒のISが激しい攻防が続いていた。

「お前達は何者だ！なぜX2を狙った？」

「答えると思ってるの？」

「だったら、無理やり聞き出すだけだ!!」

ビームザンバーがぶつかる度にスパークが走る。

(コイツ、最適化^{フィッティング}がまだ終わっていない筈なのに！)

(なぜ、私の反応速度について来れる？)

「コレだけの力を持っていなながら何故！」

「.....」

再度、ビームザンバーがぶつかり合いスパークが走る。

「!？」

頭の中に閃光が走る。

バーニアを吹かしX2から距離を取る。

それと同時に今、自分がいた所にビームライフルの光が通り抜けた。そして先ほど離脱したアマクサと多数の無人ISがX2の横に降り立った。

「メテイスなかなか追って来ないから心配したぞ。大丈夫か？」
「うん、大丈夫」

流石に一人でこの数を相手にするのは難しいだろう。
すると、今度は後ろから敵ISを目掛けてビームの光が放たれた。

「ユウさん、大丈夫ですか？」

「ユウ、この人たちは？」

「サナリイをここまでするなんて、許せません!!」

シャルとセシリア、そして青いF91を装着したりディアさんがすく横に降り立った。

「戻ってきて正解だったな、メテイス引くぞ」

「あなた、名前は？」

オープン・チャンネル
開放回線でX2の装着者から名前を聞かれる。

「鈴木勇だ・・・お前は？」

「わたしは、メテイス。今度会った時は容赦しない」

アマクサとX2はこの場を離れようと飛行を始める。

「逃しませんわ!」

セシリアがスターライトmk?を構えて射撃に移る。
しかし、その射撃は無敵ISが盾になり防がれた。
それと同時にそこにいた全ての無敵ISが爆発した。

「なっ、自爆!?!」

爆煙で目の前が見えなくなる。

爆煙が晴れるとそこにはアマクサとX2の姿はなかった。

「逃げたか・・・」

俺たちは、2機のISが居た場所を見つめるしかなかった。

・
・
・

サナリイを襲撃してきた謎のISがX2を強奪して撤退してから10分ほど経った。

俺たちは、先ほどの戦闘で消費したエネルギーの補給を受けていた。

「撃破した正体不明機は全機、自爆したらしい。あの様子じゃ、解析は難しいだろう」

「そう・・・でも、いったい何者なんでしょうか？」

「たぶん、正規のコアは使用していないだろうね」

補給作業を手伝いながら先ほどの正体不明機の話をしているとミユーラさんとオーティス主任がやってきた。

「ユウくん、X2の反応を見つけたわ」

「X2はどこに？」

「このままだと、20分程度で現在暴走中のISが現在交戦中の場所を横切るはずじゃ」

「暴走中のISって、もしかして」

「ええ。今現在、IS学園の専用機持ち二人が交戦中よ」

専用機持ちというと、一夏、鈴、ラウラ、そして篠ノ之さんの内二

人か。

「今、シュツルム・ブースターとサポートベースの準備をしているわ」

「お前にはX2の奪還・・・無理ならば撃破してもらいたい」

「・・・了解」

二人は準備の手伝いをするためにこの場を離れていった。
俺はもしもの時に備えて織斑先生に通信を入れる。

「織斑先生、聞こえますか？」

「鈴村か、聞こえているぞ。どうした？」

「サナリイで強奪されたISと襲撃したISが現在そちらの作戦区域に向かっています」

「なんだと!？」

作戦行動にイレギュラーが乱入する情報を聞いた織斑先生が声をあげた。

「自分は、強奪されたISを追跡する任務が下りました、もしかしたら目標ISと交戦する恐れがあるので目標ISの詳細なスペックデータを教えて頂けますか？」

「・・・わかった。その代わり」

「わかっています。こちらも、強奪されたISのスペックデータを送ります」

「わかった。今から送る・・・このデータは二カ国の最重要軍事機密だ。お前以外のサナリイ関係者に情報を漏洩するなよ」

「・・・了解」

通信が終了すると目標IS《銀の福音》（シルバリオ・ゴスペル）

のスペックデータが送られてくる。
送られてきたデータをセシリアとシャルは真剣な眼差しで見つめていた。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「厄介だな。攻撃と機動の両方を特化した機体だな。スペック上では第三世代ISを上回っているな」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。サナリイがリヴァイヴ用に調整してくれた防御パッケージでも連続して防御するのは難しい気がするよ」

俺たちは真剣に意見を交わす。

「ユウくん、準備ができたわ。それと新しいISスーツよ」

新しいISスーツはウェットスーツの様であった。

「なんか、ウェットスーツみたいですね」

「フル・スキン全身装甲モード時に発生する熱をかなり軽減できるわ。これで長時間、フル・スキン全身装甲モードを維持できるわね」

「ミユウラさん、ありがとうございます」

「じゃあ、それを着たら第三カタパルトに向かって」

「わかりました」

新しいISスーツに着替え、スカルハートフル・スキン全身装甲モードで起動する。

背中のX字のスラスタを折りたたみシユツルム・ブースターを着する。

「じゃあ、先に行ってるぞ」

「ユウ、直ぐに追い付くから無茶だけは、しないでね」

「ユウさん、お気を付けて」

「おう」

二人が離れるとブースターに火が付き、加速していく。

軽いGが体を襲う。

全身装甲だからこそ使用できる装備だと改めて実感する。

「X2の強奪者……たしかメティスと名乗ったな。あの感覚……
もう一度アイツに会えば何かわかるか……？」

X2に攻撃されてから感じ始めた、あの閃光かんかくのことを考えていた。

海上の戦い スカルハートVSスカルハート？（前書き）

久しぶりの更新です。

遅れてすいません

第27話です

海上の戦い スカルハートVSスカルハート？

サナリイから数キロの海上。

「・・・」

サナリイから離脱した後、メティスは考えていた。

「どうした、考え事か？」

「奴は何者？」

サナリイを離脱してから、先ほど交戦した鈴村勇のことを考えていた。

「鈴村勇・・・サナリイ所属。IS学園の生徒だろう」

「でも、あの男はわたしの反応速度についてきた」

私は、普通の人間ではない。

小さい頃から特殊な訓練を受けてきた。私には人並み外れた洞察力、直感、空間認識能力がある。

その力は、IS同士の戦闘で圧倒的な力を発揮していた。

「もしかしたら・・・」

その時、背後から何かが来ると感じた。

同時にX2のセンサーに一つの反応があった。

「来た！」

「チッ！奴か、しつこい奴め」

追撃してくると思っていたがこんなに早いとは、想定していなかった。

「イオは、離脱して。わたしが時間を稼ぐ」

「メテイス、わたしに命令する気か？」

「機体の最適化は終わってる。その機体は実験機、すでに破損してる。確実に持って帰らないと怒られる。だから……」

「……わかった。ちゃんと戻って来いよ」

「了解」

メテイスは、旋回して後ろから迫る追っ手の方に全身装甲モードを起動しながら向く。

イオは、それを確認しながら機体进行操作してこの場から離脱する。

「追い付いたぞ！X2いや……メテイス……」

ブースターを切り離し、スラスターをX字に広げる。

「鈴村勇……今度は容赦しない！」

白と黒の機体は互いに距離を詰め、そして激しくぶつかり合った。

同じ頃、少し離れた場所で一夏、箒は銀の福音と戦闘していた。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

銀の福音の猛攻を回避しながら二面攻撃を仕掛ける。

しかし、二人の攻撃はかすりもしない。

福音は、とにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。

「一夏！わたしが動きを止める！！」

「わかった！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。

同時に腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

(こっちの機体も化け物だな・・・！)

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。

この猛攻には、さすがの福音も防御を使いはじめた。

「はあああつ！！」

いける！そう思って一夏は刀を握り締める。

そこには福音の全面反撃が待っていた。

「La・・・」

甲高いマシンボイス。

その刹那、ウイングスラスターはその砲門全て開いた。

その数、36。しかも全方位に向けて一斉射撃。

「やるなっ・・・！だが、押し切る！！」

箒は光弾を紙一重でかわし、追撃する。隙ができた。しかし、光弾の向かう先に一隻の船が見えた。

・
・
・

同じ頃、白と黒の2機は銀の福音シルバリオ・ゴスベルが戦闘している区域に入り込んでいた。

「攻めきれない・・・！」

「強い・・・！」

互いに両肩に装備されている、ビームサーベルを両手に持ち、斬撃を繰り返し合っていた。

(何故、私の動きについてこられる？ どうして攻撃を避けられるの?)

メテイスは、目の前の敵がなぜ繰り返す攻撃全てを捌けるのか、わからなかった。

敵の機動を先読みして繰り返す攻撃は全て回避されるか、ビームシールドで防御された。

「うっ！」

「くっ！」

互いにビームサーベルが弾かれ海に落ちる。

残ったビームサーベルがぶつかり合い、スパークが走る。

「くっ!?」

突然二人を目掛けて光弾が飛んできた。

「なんだ!？」

「なに!？」

光弾が飛んできた方向を見ると、そこには見覚えのあるIS二機と銀色のIS銀の福音シルバリオ・ゴスベルが目に入った。一夏は封鎖されているはずの海上に浮かぶ船に向かう一発の光弾をかき消していた。

それと同時に一夏が握っていた刀から光が消え、展開装甲が閉じた。エネルギー切れ、最大にして唯一のチャンスと攻撃の要を同時に失った。

「馬鹿者! 犯罪者などかばって……。そんなやつらは!」

「箒!！」

「ツー!？」

「箒、そんな そんな寂しいこと言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ!」

「わ、わたし、は……。!」

明らかかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのが遠くから見取れた。

(?!?マズイ!)

具現維持限界 つまりエネルギー切れ。

これはIS学園のアリーナではない実戦だ。

俺は二人の援護に向かう。

「な、どこへ!?!」

「見逃してやる!どこへでも行け!?!」

X2の瞬間加速で横を通り過ぎる。
イグニッション・ブースト

「ぐあああつ!?!」

一夏は篠ノ之さんをかばうように抱きしめ、背中に銀の福音が放つ
シルバリオ・ゴスベル
光弾を受ける姿が目映った。

「一夏あああ!?!」

今度こそ二人の方に向かう。

光弾が降り注ぐ中をビームシールドを展開しながら瞬間加速を行い
イグニッション・ブースト
二人の下に急ぐ。

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音と二人の間に割って入る。

何十発、何百発もの光弾がビームシールドに向かって放たれる。

ビームシールドからはみ出していた左肩、右足にあたり装甲に命中し
装甲に亀裂が入る。長くは持たない。

「一夏つ、一夏つ、一夏あつ!?!」

背後で篠ノ之さんが一夏の名前を必死に呼んでいる。
次の瞬間、大きな音を立てて海に落ちた音がした。
シルバリオ・ゴスベル
銀の福音の攻撃
は止むことを知らない。

「!?!」

シルバリオ・ゴスベル
銀の福音に向けて、二本の光が命中し、体勢を崩す。

「ユウ（さん）！」
「シャルとセシリアか」

サナリイのある方向からシャルとセシリアがやって来る。

シャルはブースターを内蔵した大型シールド『フライトシールド』
を装備し、セシリアはサナリイが開発したサポートマシン『ノツセル』に搭乗していた。

二人の手にはそれぞれロングライフルとスターライトmk?が握られている。

「ユウ（さん）、大丈夫（ですか）？」

「ああ、大丈夫だ。二人を頼む、俺はアイツは俺が」

「わかった」

「わかりましたわ」

シャルとセシリアは、海に落ちた一夏と篠ノ之さんを引き上げに向かった。

シルバリオ・ゴスベル

銀の福音はシャルとセシリアを無視してこちらに突っ込んでくる。

オープン・チャンネル

その時、開放回線が入る。声の主は織斑先生だ。

『鈴村、聞こえるか？現状では作戦の続行は不可能だ。お前達は一夏と篠ノ之を回収して戻って来い』

「了解」

通信を切り、今度は二人にプライベート通信を送る。

「聞いての通りだ、二人を連れて離脱するぞ」

「了解」

シャルは、フライトシールドの上に気絶した一夏乗せ、セシリアはノッセルに登場したまま篠ノ之さんを支えていた。

「La・・・」
「「「!?!?!?!?!」」

再び光弾が降り注ぐ、シルバリオ・ゴスベル銀の福音だ。
体勢を立て直し、先ほどと同じように光弾を連射する。

「俺が時間を稼ぐ、二人は離脱しろ」
「ですが、その損傷では」

すでに、シルバリオ・ゴスベル銀の福音の攻撃によって左肩と右足の装甲はヒビが入っている。

「安心しろ、まだ俺もスカルハートも大丈夫だ」
「セシリア、ここはユウの言う通りにしよう。それに早く一夏の手当てをしないと」
「わかりましたわ。ユウさん、お気をつけて」
「ああ」

二人は方向展開してこの場から離脱して行く。

「さあ、行くぞ・・・!!」

ビームザンバーを抜刀し、シルバリオ・ゴスベル銀の福音に向かって突撃した。

・
・
・

二人が離脱して3分、シルバリオ・ゴスベル銀の福音との戦いは防戦一方であった。

「La・・・」
「くっ・・・！」

福音は銀色の翼から光弾を雨の様に放つ。

こちらが一発撃つと福音は倍返しと言わんばかりに数十発の光弾が降り注ぐ。

得意の接近戦を挑もうにも光弾が行く手を阻み接近を許さない。

「そろそろ、覚悟を決めるか・・・」

スカルハートの残りエルルギーは、限界が近い。攻撃も出来て、あと一回が限界だろう。

「La・・・」
「い・・・く・・・ぞおおっ！！！」

福音が光弾を放つ。同時にスラスタ全開、最大加速で福音に接近する。

両腕のビーム発振機を使い、左腕のビームシールドを、右腕はビームザンバーを抜刀する。

「うおおおおっ！！！」

光弾をビームシールドで受けながら福音に接近する。

福音は距離を取ろうとする。

「逃すかああああ！！！」

俺は、福音めがけて腰部前のシザー・アンカーを伸ばす。
シザー・アンカーは、福音の左脚を掴み拘束する。

シザー・アンカーを巻き取りながら福音との距離を無理やり縮める。俺はビームシールドに回していたエネルギーをビームザンバーに回した。

同時にビームザンバーの出力が最大になる。

「La・・・」

残った銀色の翼から光弾が放れ、雨の様に降り注いだ。

「くっ！」

無数の光弾がスカルハートのエネルギーシールドで相殺仕切れないほどの衝撃が体を襲う。

「あと少し・・・あと少しだ！もってくれっ！スカルハート！」

福音の攻撃でスカルハートの装甲には、ヒビが入っていた。

深刻的な損傷を受けている事は確実だ。だが福音との距離はこちらの攻撃が可能な距離に確実に詰められた。

「これで・・・終わりだ！」

ビームザンバーによる一閃。しかし、福音は状態を反らし攻撃は回避された。

「まだだっ！」

イグニッション・ブースト
瞬時加速で、追撃に移る。

今度こそビームザンバーの一閃は、福音の片翼を切り裂いた。片翼を失った福音は、バランスを崩した。

その隙を突き足の裏からヒートダガーの刃を展開して残った片翼目掛けて蹴りつけた。

福音は完全に体勢を崩し海に墜落した。同時にスカルハートは近くの孤島に墜落した。

「バーニア、スラスター、PIC、くそだめか。今ので完全に動かなくなっちまったか」

墜落したスカルハートはシステムがダウンしたらしく全くいうことを効かなかった。

「だが・・・とりあえずはこれで・・・!?!?」

そのとき、海面に大きな水柱が立ち、その中から福音が飛び出してきた。

「La・・・」

「やべえ、洒落にならねえぞ」

残った片翼から光弾が放たれた。

・
・
・

その頃、一夏と箒を連れて旅館に戻ったシャルとセシリアは。

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」

それだけ言って、織斑先生は一夏の手当て指示を、すぐまた作戦室に戻ろうとする。

二人は戻ろうとする織斑先生に話しかける。

「織村先生、僕とセシリアにユウの援護に戻る許可をください」
「お願いします、織村先生」

「その事なんだが・・・、先ほど鈴村の反応がLOSTした」

「そんな・・・」

「う、嘘ですわ・・・」

織斑先生の言葉に二人は言葉を失った。

戦いへ1 (前書き)

課題が私を放さない。
更新が遅れてすみません。

第28話です

戦いへ1

「La・・・」

「やべえ、洒落にならねえぞ」

福音の片翼から光弾が放たれた。

発射された光弾はスローモーションに見えた。

(死ぬか・・・俺は・・・?)

迫り来る光弾を見て俺は死を覚悟した。

「なっ!?!」

しかし、光弾は地面に着弾し砂煙を巻き上げた。
砂煙が晴れた時、福音の姿はそこにはなかった。

「逃げ・・・た? いや・・・片翼を失ったことよって狙いが逸れたのか? それとも・・・」

その時、地面に亀裂が入った。

「げっ!?!」

亀裂は段々大きくなり、大きな穴が開いた。

「うわあああああっ」

俺は穴の中に落ちた。

「……………」

ベッドの一室。

ベッドで横たわる一夏は、もう3時間以上も目覚めないままだった。その脇に控えている篤は、もうずっとこうしてうなだれていた。リボンを失って垂れた髪が、今の気持ちを表しているようだった。

（私のせいだ……）

ISの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏の体は至る所に包帯が巻かれていた。

（私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に……！！）

ぎゅうとスカートを握りしめる。

その拳が白く色を失うほど強く、強く握り締めていた。

自らを戒めるかのように、強く。

ただただ強く。

（一夏だけじゃない。私を逃がすために鈴村も……）

旅館に戻った篤を待っていたのは織斑先生より告げられた作戦の失敗と鈴村の反応LOST。

織斑先生は一夏の手当てを指示して、すぐにまた作戦室へと向かう。篤は、責められないことがまた一層辛かった。

(私は・・・どうして、いつも・・・)

いつも力を手に入れるとそれに流されてしまう。

それを使いたくて仕方がない。

わき起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある。

(なんのために修行をして・・・！)

箒リミッターにとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった。
楔。

自らの暴力を押さえ込むための、抑止力。

けれど・・・それは非常に危うい境界線なのだと思います。

薄い氷の膜のように、ほんのわずかな重みで壊れてしまう。

(私は・・・もうISには・・・)

一つの決心をつけようとした時に、突然ドアが乱暴に開く。

バンツ！！という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力もない。

「あー、あーわかりやすいわねえ」

遠慮なく入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやって来る。

その声は鈴だった。

「……………」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど箒は答えない。

答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんでしょう？」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている。全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、同時にISの補助を深く受けた状態になる。

それ故に、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなってしまうのだ。

「……………」

「で、落ち込んでますってポーズ？…つざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらを掴んで無理矢理に立たせた。

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」
「ツッー！！！」

バシッ！頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる。

そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そ

んなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは」

鈴の瞳が、箒を直視する。そこにあるのは真っ直ぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情。

「戦うべき時に戦えない、臆病者か」

その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた。

「ど……」

口から漏れた細かい言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。

「どうしろと言っただ！もう敵の居場所もわからない！戦えるなら私だって戦う！」

やっと自分の意思で立ち上がった箒を見て、鈴はふうつとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが」

言葉の途中でちょうどドアが開く。

そこに立っていたのは真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないよう

だ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを鈴はにやりとした顔で迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へ視線をやる。

そして、それはすぐに開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向ける。

「で、あなたはどつするの?」

「私……。私は」

ぎゅっつと拳を握りしめる箒。それはさっきまでの後悔とは違う。決意の表れだった。

「戦う……。戦って、勝つ!今度こそ、負けはしない!」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不適に笑う。

「まったくね。じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墮とすわよ」
「ああ！」

・
・
・
・
・

何も無い暗い空間。

いや、遠くに沢山の小さな光が見える。
まるで、空に輝く星の様だった。

「宇宙・・・なのか」

「鈴村勇、あなたを待っていました」

声のした方に振り向くとそこには、まるでお話の中に出てくるようなドレスを着た一人の少女がそこに居た。

戦いへ2(前書き)

第29話です

内容は短いです

戦いへ2

「鈴村勇、あなたを待っていました」

声のした方に振り向くとそこには、まるでお話の中に出てくるようなドレスを着た一人の少女がそこに居た。

「待っていた？」

「はい、私はあなたがここに来るのをずっと持っていました」

俺には今、自分が置かれている状況が理解できなかった。ここが何所で、なぜ待っていたのか。

「変った人、あなたはここが何所で、私が待っていた理由を知っているはずなのに」

「知っている・・・？俺が・・・？」

さらに理解できない。

「あなたは」

「え？」

目の前の少女は俺の手をそっと握った。

「あなたは、まだ本当の自分の力を知りませんか？」

「え？ええっ」

その言葉を聞くと同時に目の前に光が広がった。

「私は待っていますわ。ここで、あなたが自分の力を知る時を……」

「うっ……」

目を覚ますと、青い空が広がっていた。

「ユウくん、大丈夫？」

「ミューラさん……？おれは……たしか穴に落ちて……」

「穴に落ちた？わたしたちがここに来た時には、あなたはここに倒れていたわよ」

（倒れてた？たしか俺は、福音の攻撃で、できた穴の中に落ちたはず……それで……）

あの少女に出会った。

「目が覚めたようだな、ユウ」

「オーティス主任……」

少し離れた場所に着陸しているサナリイの輸送機の中から降りてきた。

「とりあえず、輸送機の中に入れ」

ミューラさんの肩を借りて、なんとか立ち上がる。
先ほどの戦いでかなりのダメージを負ったようだ。

「現状を簡単に説明するわ」

ミューラさんは小型PCの画面を見せながら説明する。

「福音はユウくと戦闘後、ステルスモードで離脱。現在搜索中よ」

「片翼破壊したのに、ステルスモードが使えるなんて面倒な物を作ったもんですね」

「それだけ、高性能ということだ」

「ですかね・・・」

戦闘して感じたが、福音の性能に少し異常を感じていた。

「あ、そうだ、通信機貸してもらえますか？」

「どこに連絡取るの？」

「一応、織斑先生あたりに無事と報告をして置こうかと・・・」

厳密に言えば、無事とは言えないが・・・。通信が繋がる。

「どうもです、織斑先生、山田先生、鈴村です」

「あ、鈴村くん、無事だったんですね」

「鈴村、無事だったか、早速だが悪い話がある」

「悪い話ですか・・・」

自分の無事を告げて通信を切ろうと思っていたが、聞くしかないか。

「あのバカ共が自分達だけで福音の場所を調べて向かったらしい」

バカ共って・・・まあ、情報源はラウラ辺りだろう。

「動けるようなら、あいつらの援護に行ってもらえないか？」

「・・・分かりました」

「頼むぞ、鈴村。あいつらの位置は追って伝える」

通信を切られる。

「本当に行くのか、ユウ？」

「・・・はい」

「はあ、ミューラくん、スカルハートの修理状況は？」

オーティス主任の問いに少し間を空けて答える。

「スカルハートの修理状況は現在60%。今は・・・」

「両腕と胸部の修理に手間取っており」

輸送機の奥から一人の老人が現れた。

「ウモン爺さん、何時アメリカから？」

ウモン爺さん - 本名ウモン・サモン。

サナリイ所属のメカニックで、かなりのお調子者。

先日まで渡米していた。

サナリイ内ではハツタリの多さから「語法のデバート」と呼ばれている。

ちなみに、スカルハートのドクロのレリーフを付ける様にアドバイスをくれた人物である。

「ついさっきだ。それより、修理の件だがサナリイの倉庫から色々持ってきたから、腕と胸部を交換しちまおうと思うんだが・・・どうだ？」

「それで、修理する時間が短縮できるのなら、お願いします」
「おう、任せておけ!!」

それだけ言って、また奥に戻っていった。

「で、どうやって福音と戦つつもりだ？まさか、またムチャをするつもりじゃないだろうな？」

「まさか、もうあんな事するつもりはありませんよ。それに、福音にも弱点がありますよ」

ほぼ特攻に近い形を取るのもう懲り懲りだった。

「たぶん福音の遠距離武装は翼のエネルギー射撃武器のみ。だから、アレさえどうにかできれば」

「どうにかって、どうするつもりだ？」

「俺の勘が正しければ、多分ウモン爺さんがやるうとしてしている事がそれに当たるかと・・・」

「ウモン爺さんが・・・アレか!？」

「・・・?」

オーティ主任が思い出したように言う。

その隣でミューラさんは首を傾げている。

「だが、アレは凍結処分で・・・」

アレとは、スカルハート3号機の両腕に搭載されている『エフィード発生装置』である。

エネルギー射撃を湾曲、もしくは拡散させる新兵装である。

「道具は作る人間、使う人間によってどうなるか決まります。俺に

は、義務があるんです。作った人間として、使う人間として、だから……」

「はぁ……わかった。お前は一回言ったことは曲げないからな。責任は取ろう……だが、使うからには墮として帰ってくるんだぞ。その後、報告書出してもらうつからな」

「了解。今度こそ墮としますよ……」

戦いへ2 (後書き)

夢?の中で登場した少女のイメージはイメージはシェリンドン・ロ
ナです。

再戦・リベンジ・1 VS 銀の福音(前書き)

休みは素晴らしいですね

第30話です

再戦・リベンジ・1 VS 銀の福音

旅館から三十キロ離れた沖合。

専用機持ち5人は銀の福音を相手に善戦していた。

第のIS『紅椿』を除く、4人のISは普段と異なる外見をしていた。

ラウラのIS『シユヴァルツェア・レーゲン』は、砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備。

セシリアのIS『ブルー・ティアーズ』は、強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備。

シャルのIS『ラファール・リヴァイブ・カスタム?』は、サナリイ製防御パッケージ『Gタイプ』^{ガード}を装備。

鈴のIS『甲龍』は、機能増幅パッケージ『崩山』を装備。
5人は徐々に福音を追い詰めつつあった。

『……優先順位を変更。現空域から離脱を優先に』

残った片翼で全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破をはかる。

「させるかあつー!!」

飛び出したのは真紅の期待『赤椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす!」

福音へと突撃する紅椿。

その背中から飛び降りた鈴は、両肩の衝撃砲と増設された二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が火を噴いた。

「!?!」

衝撃砲は、いつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っていた。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨を放っていた。増幅された衝撃砲 言うならば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの!?!」

「まだよ!」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させていなかった。

「シルバー・ベル銀の鈴最大稼動 かい……!?!」

バァン!

福音が、片翼の16砲門に光が溢れ、光弾が発射 されず、翼は小さな爆発を起こした。

5人には、一瞬、何が起きたのか理解できなかった。だが、それはすぐに勝機だと理解できた。

「もらったあああつ!?!」

直下からの鈴の突撃はギリギリのところまで回避されてしまう。

「はあああつ!?!」

続けて、箒が『あまつき雨月』と『からわれ空裂』を両手に持ち斬りかかる

(獲った!!)

そう思った斬撃を福音は両腕で受け止めた。

「なっ!?!」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は翼を箒に向けた。

向けられた翼には、無傷の砲身が一門だけ残っていた。徐々に光が溢れる、砲門を見て、箒は焦った。

「私を・・・忘れてもらっては、困る!」

ラウラは、ブリッツを構え、狙いを定める。

「ぼくを・・・忘れてもらっちゃ、困るな!」

シャルは、ロングレンジライフルを構え、狙いを定める。

「わたくしを・・・忘れられては困りますわ!」

セシリアは、スターダスト・シューター構え、狙いを定める。

次の瞬間、3人は福音に目掛けてそれぞれの武装で福音を狙い打った。

シャルロットとセシリアは福音の両腕を、ラウラの砲撃で福音はバランスを崩した。

「行けえええっ！箒っ！！」

ラウラが叫ぶ。

「はああああっ！！」

残った福音の翼を雨月あまづきと空裂からわれでX字に斬り裂いた。

両方の翼を失った福音は、崩れるように海へと落ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……」

「無事か！？」

珍しくラウラが慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸を整えていく。

「私は……大丈夫だそれより福音は」

「私達の勝ちだ」と誰かが言おうとしたその時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「！？？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのよう
にへこんだままだった。

その中心、青い雷の纏った福音が自らを抱くようにうずくまっていた。

「これは……！？一体なにが起こっているんだ……！？」

「まずい！これは『第二形態移行』だ！」

次の瞬間、至近距離での両翼からの一斉射撃でセシリアは海へと沈められてしまった。

「鈴に続き、セシリアまで……！よくも……！」

急加速によつて接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。展開装甲を局所的に用いたアクロバットで福音の攻撃を回避、同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによつて加速させる。

「うおおおっ……！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。

徐々に出力を上げていく紅椿に、福音が押されはじめる。

（いける！これならっ）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。
しかし

キユウウウウン……

「なっ、また、エネルギー切れだと！？　ぐあっ……！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を掴んだ。

「箒……！」

箒の危ない状況を見て二人は福音に攻撃を仕掛けようとする。

「なっ……！？」

武器を構えた二人を見て福音は、箒を盾にするように前に出す。盾にされた箒を見て、二人は攻撃を躊躇する。福音の両翼が徐々に光を増していく。

次の瞬間、福音の両翼から放たれたエネルギーの弾雨が迫る

「ラ、ラウラ、僕の後ろに……!!」
「す、すまない」

ラウラがシャルロットの後ろに回る。
激しいエネルギー弾が雨の如く降りかかる。
シャルロットは四枚の物理シールドでソレを受ける。
次々とエネルギー弾を受ける物理シールドにヒビが入る。

「シールドがっ……」
「ここまでか……」

物理シールドが破られる直前で二人は、とっさに目を閉じてしまう

「イイイインツ……!!」

「!?!?」

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。
次の瞬間、福音は強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ばされる。

『左腕エフィールド作動』

聞き覚えのない機械音声が聞こえる。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！」

目を開くと、箒の近くに白式第二形態・雪羅を纏った一夏。

「二人とも大丈夫か？」

そして、目の前には左腕を前に突き出しているスカルハート・パッチワークを纏ったユウの姿が目に入った。

再戦・リベンジ - 1 VS 銀の福音 (後書き)

サナリイ製防御用パッケージ『Gタイプ』ガード

基本は原作に登場したリヴァイブ用防御パッケージと同じ

違う点は、全てが実弾シールドである点。

アンダーマウンティング
本来ABCされる予定だったが予算の都合で見送られた。

再戦・リベンジ・2 VS 銀の福音（前書き）

第31話です

連続投稿ってやつですね

再戦・リベンジ・2 VS 銀の福音

「ユウくん大丈夫？ 顔色、悪いわよ」

「大丈夫ですよ。これぐらい・・・」

先ほどの福音との戦いでダメージが抜けてないらしい。

普通なら昏睡状態になってもおかしくない状況らしい。

オーティス主任曰く『お前は少し曲がってるから大丈夫なんだろう』
だ、そうだ。

さすがに少し傷ついたな・・・。

「あと5分で戦闘区域だ。近づけるのはそこまでだ」

輸送機のパイロットが告げる。

「了解。スカルハートを受け取ってきます」

スカルハートを修理している、後部へと向かう。

「ウモン爺さん、修理は終わってる？」

「おう、完璧に仕上げたぞ」

スカルハートは、完璧な状態で操縦者を待っていた。

修理されたスカルハートは、両腕と胸部の見た目が変わっていた。

「両腕はエフィールド発生装置内臓のエフィールドハンド。そして

胸部は新たにバルカン砲を2門追加した。」

「戦力アップになったはずだ。まあ、パッチワークみてえだが、なに今ちよちよいと色を塗って・・・」

「わりい、爺さん。時間がないんだ」

「なにい！！カッコつかねえじゃねーかつ！」

爺さんの叫びを無視して機体に体を預ける。

輸送機後部ハッチが開いていく。

「死ぬなよ、ユウ」

「ユウくん気をつけて」

「ぶっ飛ばしちまえっ！！」

オーティス主任、ミューラさん、ウモン爺さん、3人から激励を受ける。

「スカルハート・パッチワーク、行きます」

戦場に飛び出した。

・
・
・

戦域にステルスモードで接近して、最初に目にしたのは福音が箒を右腕に掴み、シャルとラウラに対してエネルギー弾の弾雨を浴びせる姿だった。

（急がないと・・・！？）

後ろから急速に接近するISをハイパーセンサーが告げる。

「ユウ、無事だったかつ！」

セカンド・シフト
第二形態移行を行った白式・雪羅を身に纏った一夏が横に並ぶ。

「ああ、お前こそ、って話してる場合じゃない！」

「そうだな、俺が筭を、シャルロットとラウラを頼む！」

「そのつもりだっ！！！」

短いやり取りを終え、シャルとラウラの元に急ぐ。

イイイインツ・・・！！

左腕の雪羅が変形して荷電粒子砲が放たれる。

強力な荷電粒子砲を受けて福音が吹き飛ぶ。

『左腕部エフィールド作動』

起動音声と共に左腕のエフィールドが起動する。

左腕を前に向けながら、エネルギー弾と二人の間に割ってはいる。

エネルギー弾は、エフィールドによって拡散して消える。

「二人とも大丈夫か・・・？」

このシチュレーションにあったセリフを言ってみる。

「お前、鈴木・・・」

「ユ、ユウ・・・本物だよな？」

「本物って、偽者が居るのか？」

シャルの言葉に少しふざけて答えてみる。

よく見ると、シャルの目尻に涙が浮かんでいる。

「心配してたのに・・・」

「す〜ず〜む〜ら〜」

「あ、あの、その、すいません・・・心配かけて」

シャルは顔を横に向け、ラウラが睨む。

「あ、後でなんでも言うこと聞くから。だから機嫌直してくれ」

「本当・・・？」

「ああ、聞ける範囲でな」

「約束だよ・・・」

そう言いながら目元の涙をぬぐっている。

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ・・・」

「じゃあ、行ってk」おい、一夏っ！イチャついている所、悪いがそろそろ仕掛けるぞ」お、おう。いま行く！」

遠目から見るとイチャイチャしている様に見える二人を茶化す意味を込めて言った。

「じゃあ、決着を付けて来る・・・！」

言うなり、フル・スキン全身装甲モードを起動させ、こちらに向かってきた福音へと急加速、正面からぶつかり合う。

「さあ、リベンジ再戦だ！」

ウモン爺さんが修理のついでにインストールしてくれた新型マルチウエポン『ムラマサ・ブラスター』を右腕で構え、切りかかる。当然のように回避した福音に、そのまま突きの体勢で迫る。

しかし、あと少し距離が足りない。

「逃がさん！」

ムラサメ・ブラスターの剣先からビームサーベルの刃が伸びる。伸びた刃が福音の装甲を削る。

「再戦と行くか！」

続けて一夏が雪片式型を右手だけで構え、切りかかるそれをひらりとのけぞってかわした福音を、一夏は左腕の新兵器『雪羅』で追っていた。

雪羅は状況に応じていくつかのタイプへと切り替わるらしく、先ほど荷電粒子砲を発射した時とは違い、指先からエネルギー刃のクローが出現していた。

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を削る。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対応・・・開始』

エネルギーの翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。次の瞬間、福音の掃射反撃が始まった。

「無駄だっ・・・！フィールドの腕を持つコイツにエネルギー兵器は効かないっ・・・！！！」

左腕を前に構える。

『左腕部エフィールド作動』

起動音声と共に左腕のエフィールドが起動する。

福音が放った弾雨は、エフィールドによって湾曲しエネルギー弾がそれる。

「そう何度も食らうかよ！」

一夏は避けようとせず、左手を構えて前を飛び続ける。

先ほどとは違う形態に雪羅が変形する。

光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく。

「零落白夜の盾か・・・また燃費が悪そうな物を」

俺もそうだが、もしも福音が実弾兵器を有していたら形成は不利になっただろう。

『状況変化。戦闘レベル最大・・・最大攻撃力・・・排除開始』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしなれさせていた翼を自身へと巻き付け始めた。

それはすぐに球状になって、エネルギーの繭を形成する。

次の瞬間、翼が回転しながら一斉に開き、全方位へと嵐のようにエネルギーの弾雨を降らせた。

(このままじゃ、セシリア達が・・・)

この全方位の攻撃は、現在ダメージを負っているセシリア達に被害が出る。

一夏は今にも動き出そうとしていたが、そこに怒鳴り声が響く。

「あんだ達、何やってんのよ！あたしたちは腐っても代表候補生よ？余計な心配しないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴・・・わかった！」

今は信じるしかない。

今の俺達にはそれしかない。

信じきるしかない。

俺と一夏は顔を見合わせ頷く。

「一夏、とつとと終わらせるぞ！」

「おう！」

俺は、ムラマサ・ブラスターを構えなおす。

一夏は右手の雪片と左腕の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出す。

俺達は再度福音へと突撃した。

・
・
・

「はああああっ！！！」

福音の翼を狙った一撃が回避される。

「ぜらあああっ！！！」

一夏の零落白夜の光刃が福音のエネルギー翼を切り裂く。

しかし、両方の翼を切るのは至難の業で、俺と一夏の連続攻撃は、またしても二撃目も回避されてしまう。

そうしている間に失った翼が再構成されて、こちらに強力無比な連

続射撃を行ってきた。

「くっ！」

「一夏、俺の後ろへ！」

『左腕フィールド使用限界。強制冷却開始。右腕フィールド作動』

左腕のフィールドの使用可能時間が終了し、右腕のフィールドが作動する。

このフィールドは使用に105秒、冷却に120秒かかり、連続して使うことが出来ない。

しかも、冷却に15秒余計にかかる。

両腕合わせて210秒間エネルギー武装に対して無敵だが、冷却に240秒かかり30秒間無防備になってしまうデメリットが存在する。

あと90秒、防御の心配はない。

しかし、攻撃があと一步届かない。

先ほどから全身装甲モードで戦闘している、スカルハートの稼動限界が近い。
フル・スキン

(どっつする……)

一夏は先ほどから零落白夜を作動させたまま戦っている。

このままだと、一夏もエネルギー切れで稼動限界が来るだろう。

(どっつする……)

リミッターなしの軍用ISがあと、どれほどのエネルギーを持っているか検討がつかない。

(どうする・・・どうしたら・・・)

「一夏！鈴村！」

「し、篠ノ之さん!？」

「箒!？お前、ダメージは」

「大丈夫だ！それよりも、これを受け取れ！」

篠ノ之さんの 紅椿の手が白式とスカルハートに触れる。
その瞬間、紅椿から

「なっ、エネルギーが!？」

「回復した!？箒、これは」

「今は、考えるな！一夏！鈴村！」

「そうだな、これで決めるぞ！一夏！篠ノ之さん！」

「ああ！」

「お、おう！」

まず散開、福音を囲むように距離を取った。

「うおおおっ！」

一夏が雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高め、巨大な光の刃を横に振るった。

福音は縦軸一回転して回避、こちらを再び捉えると同時に光の翼を向けてくる。

「篠ノ之さん！」

「任せろ！」

一夏に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び斬激で断ち切る。

「逃がすかあつ！」

さらに脚部展開装甲を開放し、急加速の勢いを乗せた回し蹴りを福音の本体へと放った。

紅椿の回し蹴りを受け、吹き飛んだ福音に対して俺は、ムラマサ・ブラスターの大型剣状の外縁部にそって木の葉状に展開されたビームサーベルで残りの光翼を切り裂いた。

そして、最後の突きを繰り出そうとしている一夏に、福音は最後の悪足掻きを見せる。

最後の悪足掻きで放ったのはムーンサルトだった。

「なっ、しまった!？」

その攻撃は、雪片式型を持っていた腕を下から上に蹴り上げた。それにより雪片式型は、一夏の手から離れてしまった。

同時に零落白夜の光が弱くなっていく。

「一夏あああつ!！」

完全に零落白夜の光が消えた雪片式型を左腕でキャッチする。

「分かってる！」

雪片式型に零落白夜の光が戻る。

一夏から雪片式型の使用許可が出た証だ。

しかし、制御がうまく出来ない。

先ほど、一夏が横に振った巨大なエネルギー刃以上に大きくなっている。

『逆転だぜ!』 b y 宇宙一のジャンク屋。

『チエスト!』 b y タキシードを着た復讐鬼。

『やってやるぜ!』 b y 獣戦機隊リーダー。

などのセリフが似合いそうなサイズだ。

「もらったああああっ!!!」

巨大な光の刃を縦に振り下ろす。

しかし、振り下ろされる刃は、思ったより速さがでない。福音はゆっくりと刃の射線上から離れていく。

「ダメか・・・!?!」

「いや」

「そのまま」

「振り下ろして!!!」

信じられる仲間の声、それを信じてそのまま振り下ろした。

次の瞬間、狙撃を受け、福音が射線上に戻る。

「おおおおおっ!!!」

シュゴオオオオ

俺の叫びに呼応するかの様に、頭部のマスクが展開して放熱される。福音は光刃に飲み込まれ、そしてすぐにまた現れる。

しかし、福音はもう動かなかった。

この時点で「チリーン」という音が聞こえたら危なかったな。

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・」

ISが解除され、操縦者が海へと重力に引かれて、海へと墮ちていく。

「ヤベエ ！？」

「 ったく、ツメが甘いだよ、ツメが」

ダメージから回復した鈴が、海面スレスレで操縦者をキャッチした。少し離れた所には、先ほど狙撃してくれたラウラ、セシリア、シャルの姿が見える。

「終わった・・・か？」

「ああ、終わったな」

「ああ・・・。やっと、な」

一夏と篠ノ之さんが横に来て、肩を並べる。

一夏に雪片を返し、一息つく。

空を見上げると、すでに日は傾き始め、美しい夕闇に染まっていた。

再戦・リベンジ・2 VS 銀の福音（後書き）

マラマサ・ブラスター

X3に装備されていた新型マルチウエポン。

大型剣状の本体外縁部にそって14基のビームサーベルを備え、刀身部分にビームガンを内臓。

近接戦闘と射撃の両方に対応が可能となっている。

ビームサーベルとして使用した場合、エネルギー消費が激しいが零落白夜に近い切れ味を発揮する。

帰還（前書き）

遅れてすいません。

久しぶりの投稿です。

リアルがかなり忙しいので描いている時間がそんなに取れないので、
こんな感じになってしまいました。

第32話です。

帰還

「作戦完了」と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「・・・はい」

戦士達の帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待つていた織斑先生に俺達はきつく言われ、勝利の感触はおぼろげだ。

今は大広間で全員正座。

この状態がすでに30分程度続いている。

横に座っているセシリアは顔が真っ青になっており、危険な状態だ。

「ところで鈴村、お前どうしてそこにいるんだ？」

「どうしてって、独自行動により重大な違反を・・・ってアレ・・・？」

よくよく考えてみれば、俺は織斑先生から『動けるようなら、あいつらの援護に行ってもらえないか？』と言われている。つまり、俺は独自行動を行っていないことになる。

「あのくもしかして、俺って怒られ損ですか・・・？」

「そうなるな・・・」

それを聞いて誰も座っていない左横に正座の体勢を崩すために倒れた。

長時間正座をしていたため、すでに足はしびれて動かないからだ。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……。…」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。

さつきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと大忙しで動き回っていた。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。あつ！男女別ですよ！わかっていますか、織斑君、鈴木君！？」

「「わかってますよ」「」

というか、『脱いで』のあたりで女子がそれとなく自分の体を隠したのが、少し傷ついた。

やはり、男ってそんなにジロジロ見たりするように思われているのだろうか……。

「……。…」

「な、なんですか？織斑先生」

先ほどから、じーっと睨まれていた一夏が口を開いた。また怒られるのか……？

「しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」「え？あ……。…」

織斑先生は普段見せない顔をしていたように見えたが、すぐに背中

を向け表情が見えなくなる。

鬼の目にも何とかがって言葉があつたな。

あ、ヤバ、気付かれたか？睨んでるよ。

「……………」

(なんで女子一同こつちを睨んでるんだ？……この雰囲気、部屋を出たほうがいい気がする)

俺は何も言わずに立ち上がり部屋から出ようとする。

「ユウ、何所に行くんだ？」

「あの、織斑君？みんなの診察をしますから、ええと」

「……………」

廊下に出た瞬間、五人の声が響き一夏が追い出される。

同時に、びしゃりと音を立てて閉じた襖に、一夏は背中を預けて大きく息を吐いた。

「なあ、ユウ。仲間を、守れたんだよな。俺たちは」

「ああ、そうだな」

・
・
・

織斑先生はご立腹の様子だ。

といつても、夕食で来るのが遅くなったから怒られているのではない。

「まったく、お前は何を考えているんだ」

「……………」

最初の福音との戦闘で受けた傷は、自覚していたがそれは酷いもので『ムリして戦闘していたのではないか』という感じに現在怒られている。

「それにしても、ISは凄いですよね。重症を簡単に治しちゃうんですから」

発表されているISの技術の中には、操縦者を保護する機能はあっても回復させる機能は無いはずだ。

しかも、一夏は『目が覚めたら治ってた』って言ってたし。

まだまだ、ISには色々な機能が隠されているらしい。

それは、製作者の意図なのか、ISの自己進化なのか……。

「話をすり替えるな！」

「……はい」

「でも実際に織斑君のケガは痕も残さずに治してしまったんですから」

「ほお……山田君、君はどっちの味方かね……？」

そう聞かれた山田先生は、しばらくオロオロしていた。

その様子を見ていた織斑先生が部屋の壁に掛けられている時計をチラリと見た。

「そろそろだな……」

「そろそろ？」

「わたしは少し用事がある。山田君、後は頼めるか？」

「え？あ、はい。わかりました」

「では、頼んだぞ」

そう言って織斑先生は部屋から出て行った。

「用事ってなんでしょっかね？」

「さあ？」

俺と山田先生はそろって首を傾げた。

帰還（後書き）

今回のように更新が遅れる事があるかもしれませんが、これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3989r/>

IS -インフィニット・ストラトス- スカルハート

2011年11月28日00時45分発行